赤磐市文化財調査報告　第７集

着　銅　遺　跡

あかいわ山陽総合流通センター
開 発 事 業 に 伴 う 発 掘 調 査

２０１４年

岡山県赤磐市教育委員会

着銅遺跡全景（南東から）

序

本書は、平成24年度に実施した岡山県赤磐市長尾地内に所在する着銅遺跡の発掘調査成果を収載しています。着銅遺跡は赤磐、岡山両市の境界をなす丘陵から北に派生する尾根の東斜面に位置し、砂川によって形成された平野に面しています。

この度、あかいわ山陽総合流通センター地区内において、民間事業者による開発事業が計画されました。赤磐市教育委員会では、遺跡の取扱いについて関係者と協議を重ねてきましたが、やむなく記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査の結果、古墳時代から中世にかけての集落跡が確認されました。このうち、丘陵斜面に築かれた古墳時代の竪穴住居のなかには、斜面上位からの雨水等の流入を防ぐための構造をもち、壁体に造り付けのカマドが認められるなど、貴重な成果を得ることができました。

これらの発掘調査成果を収めた本書が埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いです。

発掘調査の実施、報告書の作成に際しましては、株式会社ユー・エス・エス岡山をはじめ関係各位ならびに土地所有者・地元の方々から多大な御支援と御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

赤磐市教育委員会
教育長　永 島　英 夫

例　　言

1　本書は、あかいわ山陽総合流通センター開発事業に伴い、株式会社ユー・エス・エス岡山（岡山県赤磐市尾谷字坊奥991　代表取締役安藤之弘）と赤磐市教育委員会の委託契約に基づき、赤磐市教育委員会が実施した着銅遺跡の発掘調査報告書である。

2　着銅遺跡は、赤磐市長尾500番地ほかに所在する。

3　確認調査は、平成23年２月１日～24日に、赤磐市教育委員会職員澤山孝之・有賀祐史・畑地ひとみが行い、本発掘調査は、平成24年10月９日～12月27日に、同職員高田恭一郎・有賀・畑地が担当して実施した。本発掘調査面積は500㎡である。

4　本書作成のための整理作業は、平成25年度に赤磐市教育委員会において行った。

5　本書に関する遺物の内、石器石材については鈴木茂之氏（岡山大学）、緑釉陶器については高橋照彦氏（大阪大学）に有益な御教示をいただいた。

6　本書の執筆は、高田・有賀・畑地が担当し、全体の編集は高田が行った。

7　本書に関連する出土遺物及び図面・写真等は、赤磐市教育委員会（岡山県赤磐市下市337）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。また、報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。調査地の磁針方位は西偏７°24′である。

2　本書掲載の遺構・遺物の縮尺率は各図に記しているが、基本的には次のとおり統一している。

　竪穴住居・段状遺構・掘立柱建物：1/60　　土坑・溝断面・柱穴：1/30

　土器：1/4　　石器・石製品：1/2・1/3　　鉄製品：1/3

3　図５の遺構全体図では、遺構名について次のような略称を用いている。

　竪穴住居：住　　段状遺構：段　　掘立柱建物：建　　土坑：土　　柱穴：柱

4　遺物番号については、土器・陶器については番号だけを付け、石器・石製品にはＳを、鉄製品にはＭを、番号の前に付けている。

5　掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

6　土層断面図の土色は、各調査員の記述に従っており、特に統一していない。

7　図２は、国土地理院発行の1/50,000地形図「和気」「岡山北部」を、図３は赤磐市役所作成の1/2,500地形図をそれぞれ複製・加筆したものである。

8　時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。

9　本書掲載の図中の被熱範囲等に付したトーンは、以下のとおりに統一している。

　赤色被熱範囲　　地山

目　　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1
第２章　発掘調査の経緯と経過 …… 5
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 5
　第２節　報告書作成の経過 …… 8
　第３節　日誌抄 …… 8
　第４節　発掘調査及び報告書作成の体制 …… 9
第３章　発掘調査の概要 …… 10
　第１節　調査の概要 …… 10
　第２節　古墳時代の遺構と遺物 …… 10
　第３節　古代以降の遺構と遺物 …… 19
　第４節　包含層等出土の遺物 …… 21
第４章　総　括 …… 22
遺構一覧表 …… 23
遺物観察表 …… 23
図版
報告書抄録

図 目 次

図１　遺跡位置図（1/2,000,000）…… 1
図２　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）…… 2
図３　調査位置図（1/2,500）…… 6
図４　確認調査出土遺物（1/4・1/3）…… 7
図５　全体図（1/250）…… 11
図６　竪穴住居１・外周溝１・２（1/60）・
　　竪穴住居１カマド（1/30）…… 12
図７　竪穴住居１・外周溝１・２出土遺物（1/4）… 13
図８　竪穴住居２（1/60）…… 13
図９　竪穴住居３（1/60）…… 14
図10　竪穴住居４（1/60）…… 14
図11　段状遺構１・２（1/60）・
　　段状遺構１出土遺物（1/4）…… 15
図12　段状遺構３（1/60）・出土遺物（1/4）…… 15
図13　土坑１～３（1/30）…… 16
図14　土坑４（1/30）・出土遺物（1/4）…… 16
図15　土坑５（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 17
図16　土坑５断面図（1/30）…… 18
図17　溝１～３（1/30）…… 18
図18　溝４（1/30）・出土遺物（1/4）…… 19
図19　溝５（1/30）…… 19
図20　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 19
図21　溝６（1/30）・出土遺物（1/4）…… 20
図22　溝７（1/30）・出土遺物（1/4）…… 20
図23　溝８（1/30）…… 20
図24　柱穴１・３（1/30）・
　　柱穴２出土遺物（1/3）…… 21
図25　包含層等出土遺物（1/4・1/2）…… 21

巻頭図版目次

巻頭図版　着銅遺跡全景（南東から）

図版目次

図版１
１　竪穴住居１・外周溝１・２（南東から）
２　竪穴住居１カマド（南から）
３　竪穴住居２（南西から）
図版２
１　竪穴住居３（南東から）
２　竪穴住居４、段状遺構３（北東から）
３　段状遺構１・２（南から）
図版３
１　土坑４遺物出土状況（南から）
２　土坑５、竪穴住居４、段状遺構３（北から）
３　土坑５遺物出土状況（東から）
図版４
土器・石器・鉄器

表 目 次

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧…… 9
表２　遺構一覧表…… 23
表３　遺物観察表…… 23

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

岡山県東南部に位置する赤磐市は、県南に広がる広義での岡山平野の北東側にあたり、北から続く吉備高原の丘陵地を含み広がる、南北に細長い市域を有する。市域の東端には、県の三大河川の一つである吉井川が南流し、西側には同じく旭川が市域に近接して南流する。また、市域西部では中規模河川である砂川が南北に貫流する。これら河川やその支流に沿って大小いくつもの盆地状の平野が形成されており、丘陵と平野が交錯した状況を示している。丘陵地の多くは花崗岩あるいはその風化土からなるが、南部では流紋岩や泥質岩なども分布する。

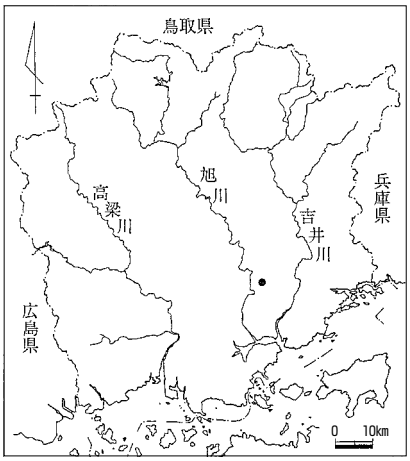


図１　遺跡位置図（1/2,000,000）

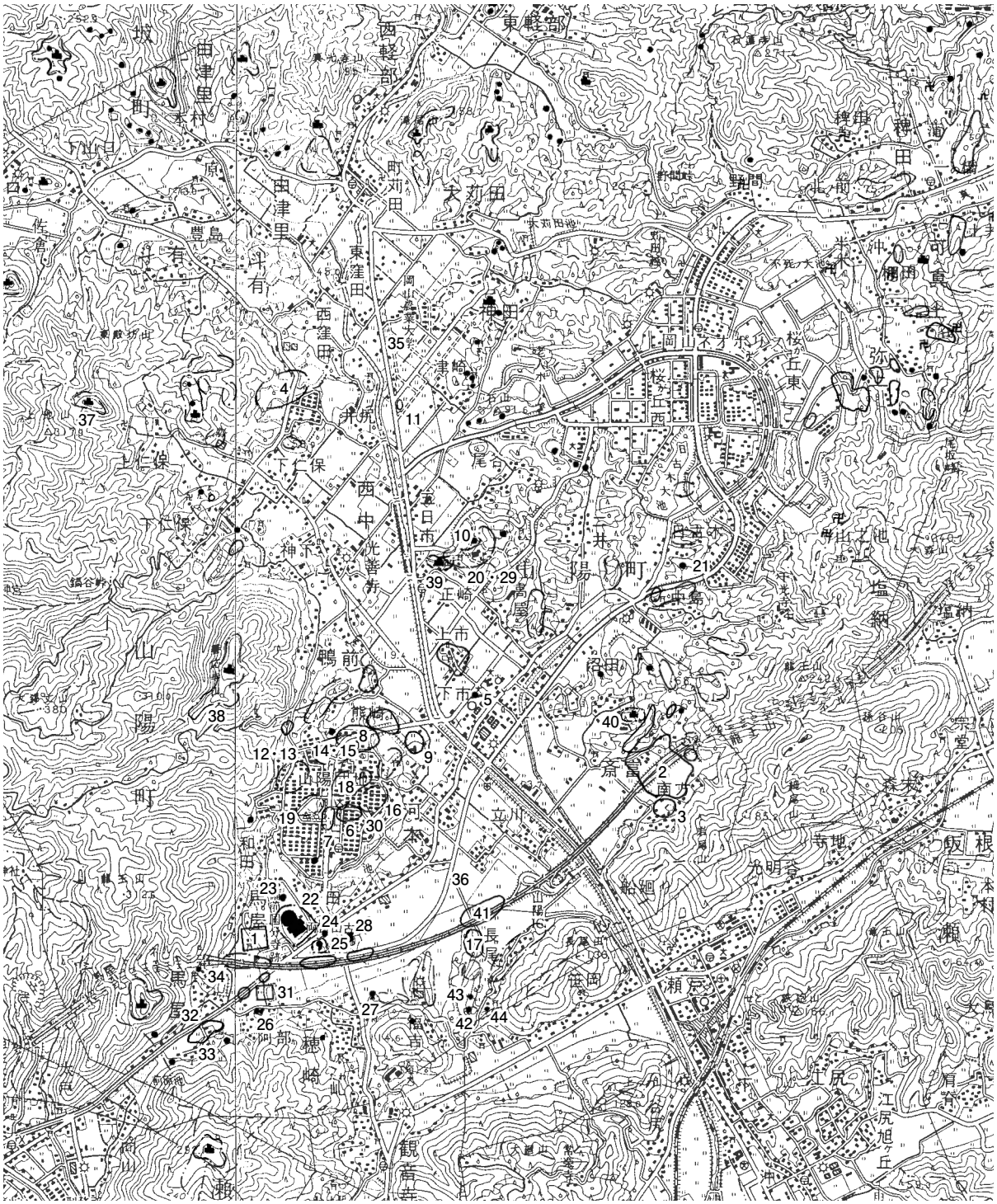
このうち砂川は、大字仁堀西の山地に源を発して花崗岩の丘陵地を通り、中流域にあたる大字町苅田から立川にかけて沖積平野を形成し、さらに平野南端の船廻りと呼ばれる山峡を通じて岡山市東区瀬戸町に注いでいる。この砂川中流域平野の規模は、東西約5.5㎞、南北約6.3㎞を測る。海抜は11～25ｍで、標高200～300ｍの山々に囲まれており、東側の丘陵は比較的低い。遺跡の多くは、この低平な沖積平野もしくは平野に面した丘陵の先端や斜面に形成されている。着銅遺跡は、この平野の南縁にあたる大字長尾に所在し、他の遺跡同様、平野に面した丘陵斜面に立地する。

第２節　歴史的環境

旧石器時代・縄文時代　着銅遺跡の所在する砂川中流域の沖積平野では、これまでのところ旧石器時代の明確な遺構・遺物は確認されていない。

縄文時代の遺跡としては、深鉢や有舌尖頭器・石鏃・石錘などの石器が発掘調査で出土した備前国分寺跡（１）がある。このうち有舌尖頭器は草創期に属し、当該地で確認されている遺物では最も古い時期のものである。また、斎富遺跡（２）からは後・晩期の土器と軟玉製丸玉が出土し、晩期の南方前池遺跡（３）では、イチイガシやトチの実などの堅果類を貯蔵した貯蔵穴がまとまって検出されおり、当時の食生活を知る上で貴重な遺跡である。さらに吉原遺跡（４）からは晩期の石棒が出土している。

弥生時代　前期の土器は、南方前池遺跡と山陽小学校遺跡（５）から出土しており、人々の沖積平野への進出を物語る資料と考えられる。また中期以降の遺跡は、当該地域の各所で確認されている。中でも両宮山古墳の北東側、東高月丘陵に営まれた中期後半の用木山（６）・惣図（７）・門前池（８）



1 備前国分寺跡
2 斎富遺跡
3 南方前池遺跡
4 吉原遺跡
5 山陽小学校遺跡
6 用木山遺跡
7 惣図遺跡
8 門前池遺跡
9 門前池東方遺跡
10 浦山遺跡
11 丸田遺跡
12 四辻峠方形台状墓
13 四辻土壙墓遺跡
14 便木山方形台状墓
15 便木山遺跡
16 愛宕山土壙墓遺跡
17 着銅遺跡
18 用木古墳群
19 野山古墳群
20 正崎１号墳
21 中島１号墳
22 両宮山古墳
23 和田茶臼山古墳
24 正免東古墳
25 森山古墳
26 朱千駄古墳
27 小山古墳
28 廻り山古墳
29 正崎２号墳
30 岩田14号墳
31 備前国分尼寺跡
32 高月駅家推定地
33 馬屋森向遺跡
34 馬屋遺跡
35 西山高陽条里遺構
36 高月条里遺構
37 葛木城跡
38 善応寺城跡
39 正崎城跡
40 沼田城跡
41 長尾遺跡
42 山の間１号墳
43 山の間２号墳
44 道通山古墳

図２　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

等の集落遺跡群は、卓越した遺構密度と遺物量から当地域の拠点集落の一つと考えられる。これら遺跡群と同様、平野に面した丘陵の尾根や斜面などの比較的高所へ立地する中期中葉から後期初頭の集落は多い。続く後期の遺跡は、谷口や山裾の微高地などに立地する大規模な集落跡が多くなる。中期から続く門前池遺跡のほか、門前池東方遺跡（９）、斎富遺跡、浦山遺跡（10）が確認されている。また平野部においては、旧河道により形成された自然堤防上の集落の存在も知られ、後期前半の丸田遺跡（11）がある。

墳墓については、東高月丘陵に築かれた中期の四辻峠方形台状墓（12）と四辻土壙墓遺跡（13）、後期の便木山方形台状墓（14）と便木山遺跡（15）、愛宕山土壙墓遺跡（16）がある。このうち便木山遺跡では、木棺墓群の中に築かれた特殊器台・壺を伴う小規模な弥生墳丘墓がある。

古墳時代　集落遺跡は、東高月丘陵の門前池遺跡や着銅遺跡（17）、斎富遺跡がある。斎富遺跡は、丘陵の裾部から広がる扇状地状の平野に位置する集落跡で、陶質土器や軟質系土器など朝鮮半島系遺物が出土し、朝鮮半島からの人の移動や移住が想定される。また、大量の鉄滓や羽口、鉄鉱石等の出土と炉の検出から、製鉄関連作業が行われていた可能性が高い。中期後半以降、竪穴住居や掘立柱建物等の著しい増加が認められるなど、当地域の古墳形成との関わりが注目される。

前期古墳は、東高月丘陵の用木古墳群（18）において用木１号墳、同３号墳と続く首長墓系譜が形成されるが、後に続かない。同じ東高月丘陵には、小規模な方・円墳で形成される前～中期の野山古墳群（19）が形成されている。発掘調査が行われた古墳としては、正崎１号墳（20）や中島１号墳（21）がある。

中期後半から後期前半には、全長206ｍを測る巨大な前方後円墳の両宮山古墳（22）と、その周辺に中規模前方後円墳が集中して築かれるなど、卓越した様相を呈する。両宮山古墳は墳丘を囲む二重周濠を有し、その古墳総長は349ｍにも達する。両宮山古墳に近接して、二重周濠を有する和田茶臼山古墳（23）と、正免東古墳（24）、森山古墳（25）が築造された。後期初頭には、朱千駄古墳（26）、小山古墳（27）が、後期前半には廻り山古墳（28）が築かれている。その他、発掘調査が行われた古墳として中期後半の正崎２号墳（29）がある。

後期後半には東高月丘陵に横穴式石室をもつ円墳、岩田14号墳（30）が築かれる。その石室規模や豊富な副葬品から有力首長墓と考えられる。

古代　奈良時代には、両宮山古墳の西側に隣接して備前国分寺跡、その南側に備前国分尼寺跡（31）が造営される。この両寺の間、両宮山古墳の南側を古代山陽道が東西方向に通じていた可能性が高く、両宮山古墳の西側1.1㎞には高月駅家推定地（32）が所在し、古代備前国の陸路として枢要の地であったと考えられる。高月駅家周辺に位置する馬屋森向遺跡（33）では、平安時代以前の古道と推測される遺構が検出され、平城宮式の１点を除くすべての軒丸瓦が備前国分寺の創建瓦と同文である。また、奈良時代から室町時代前半期を中心とする建物群を検出した馬屋遺跡（34）がある。

この地域の平野部には現在でも整然とした条里地割が残る。これら西山高陽条里遺構（35）や高月条里遺構（36）地割がいつ施行されたものかは判然としていない。古代においてこの地域は赤坂郡鳥取郷にあたり、平安時代末に在地領主である葛木氏により鳥取荘として開発され、長講堂領の荘園となった。

中世　戦国時代には、遠藤氏が鳥取荘を本領としており、浦上政宗に仕えた後、宇喜多直家、そして岡山藩主池田忠雄に仕えた。戦国時代の備前国の支配権争いにおいて、鳥取荘のあるこの地域は備前

中南部における重要な地域であった。中世山城として、葛木城跡（37)、善応寺城跡（38)、正崎城跡（39)、沼田城跡（40）などが知られている。（高田恭一郎）

引用・参考文献

有賀祐史ほか2013『向山宮岡遺跡 丸田遺跡 中屋遺跡の大量出土銭』赤磐市文化財調査報告第６集　岡山県赤磐市教育委員会

伊藤晃ほか1995『松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99　岡山県教育委員会

宇垣匡雅2004『森山古墳 両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第２集　岡山県山陽町教育委員会

宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第１集　岡山県赤磐市教育委員会

宇垣匡雅2008『史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書』赤磐市文化財調査報告第２集　岡山県赤磐市教育委員会

宇垣匡雅ほか2009『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告第３集　岡山県赤磐市教育委員会

岸田裕之1995「浦上政宗支配下の備前国衆と鳥取荘の遠藤氏」『岡山県地域の戦国時代史研究』広島大学文学部紀要55-2

神原英朗1971～1977『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』１・２・４　山陽町教育委員会

下澤公明ほか1996『斎富遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105　岡山県教育委員会

則武忠直ほか1986『山陽町史』山陽町

則武忠直ほか2004『正崎２号墳』山陽町文化財調査報告１　山陽町教育委員会

第２章　発掘調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

１　発掘調査の契機

赤磐市は､｢あかいわ山陽総合流通センター地区計画」を策定し、長尾・立川地内の開発を進めている。このセンター地区内において、株式会社ユー・エス・エス岡山（以下、事業者）による開発事業が計画され、平成22年４月、事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについての協議を受けた。当事業予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地である長尾遺跡及び山陽町№359散布地が含まれていることから、事前に確認調査を行い、遺跡の内容や範囲を把握したうえでその対応について協議することとした。

平成23年２月の確認調査の対象地は、開発事業地内での市道長尾石ヶ坪線の付け替えによる掘削の及ぶ範囲であり、調査内容の詳細は次項に述べるとおりである。この確認調査により、対象地の南端にあたる丘陵東斜面に遺構の広がりが認められたことから、山陽町№359散布地（確認調査後、着銅遺跡と名称変更）の当該箇所の対応について事業者と協議を重ねた結果、現状での保存が困難であることから、平成24年度に本発掘調査を実施することになった。

平成24年８月、事業者から文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、岡山県教育委員会教育長から工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知がなされた｡平成24年９月28日、事業者と赤磐市教育委員会教育長は発掘調査に関する覚書を締結し、平成24年10月から赤磐市教育委員会が発掘調査に着手する運びとなった。（高田）

２　確認調査

事業対象地西端の北方向に延びる低丘陵には､長尾遺跡及び山陽町No.359散布地が周知されており、遺跡の広がりと残存状況を把握するため、平成23年２月に確認調査を実施した。調査前の対象地は畑地や果樹園として利用されていて、丘陵の東向き緩斜面は２から３段の階段状に造成されていた。トレンチは長辺を斜面上方から下方へ向かって設定し、その合計は６か所である。

調査の結果、対象地南部のＴ４・５において遺構を検出した。Ｔ４は斜面上段に設けたもので、斜面上方の地山が開墾のため水平に削平されていたが、下方に残る斜面部から段状遺構１基・溝３条・柱穴２基が確認された。また、トレンチ南東隅で土坑を検出し、その床面近くから須恵器の杯身22が出土した。これらの遺構は、本発掘調査における再検出により、段状遺構は段状遺構１の北端、溝３条のうち東側の２条は竪穴住居１の外側に設けられた外周溝１・２であることが判明した。さらに、杯身を伴う土坑は竪穴住居１の北西部にあたることが判明した。したがって、Ｔ４では古墳時代の遺構が広がっていることを確認することができた。出土遺物として砥石Ｓ２がある。

Ｔ５は斜面中・下段に設けたトレンチで、中段で柱穴３基を検出した。下段では傾斜する地山上に

比較的厚く黒褐色土の堆積が認められ、弥生土器、土師器、須恵器等が認められた。この黒褐色土は、Ｔ２・３の斜面下方でも認められ、丘陵裾から低位部に向かって丘陵上部から流出した遺物が堆積した土層であると考えられる。図４に示した土器は、主にＴ２・３・５の遺物包含層から出土したもので、弥生土器１～６・９～13、土師器15・16がＴ５から、弥生土器７・８、土師器17がＴ２から、須恵器14がＴ３から出土した。７～10は高杯で、11～13は器台である。器台12は外面に凹線文を施し、円孔をもち、格子を刻んだ突帯を貼り付けている。出土土器は弥生時代後期前半に属すものが主体をなす。なお、本発掘調査区で明確に弥生時代に属すと考えられる遺構が認められなかったため、弥生時代後期の遺構は遺物の出土状況から斜面部ではなく丘陵上に展開する可能性が考えられた。

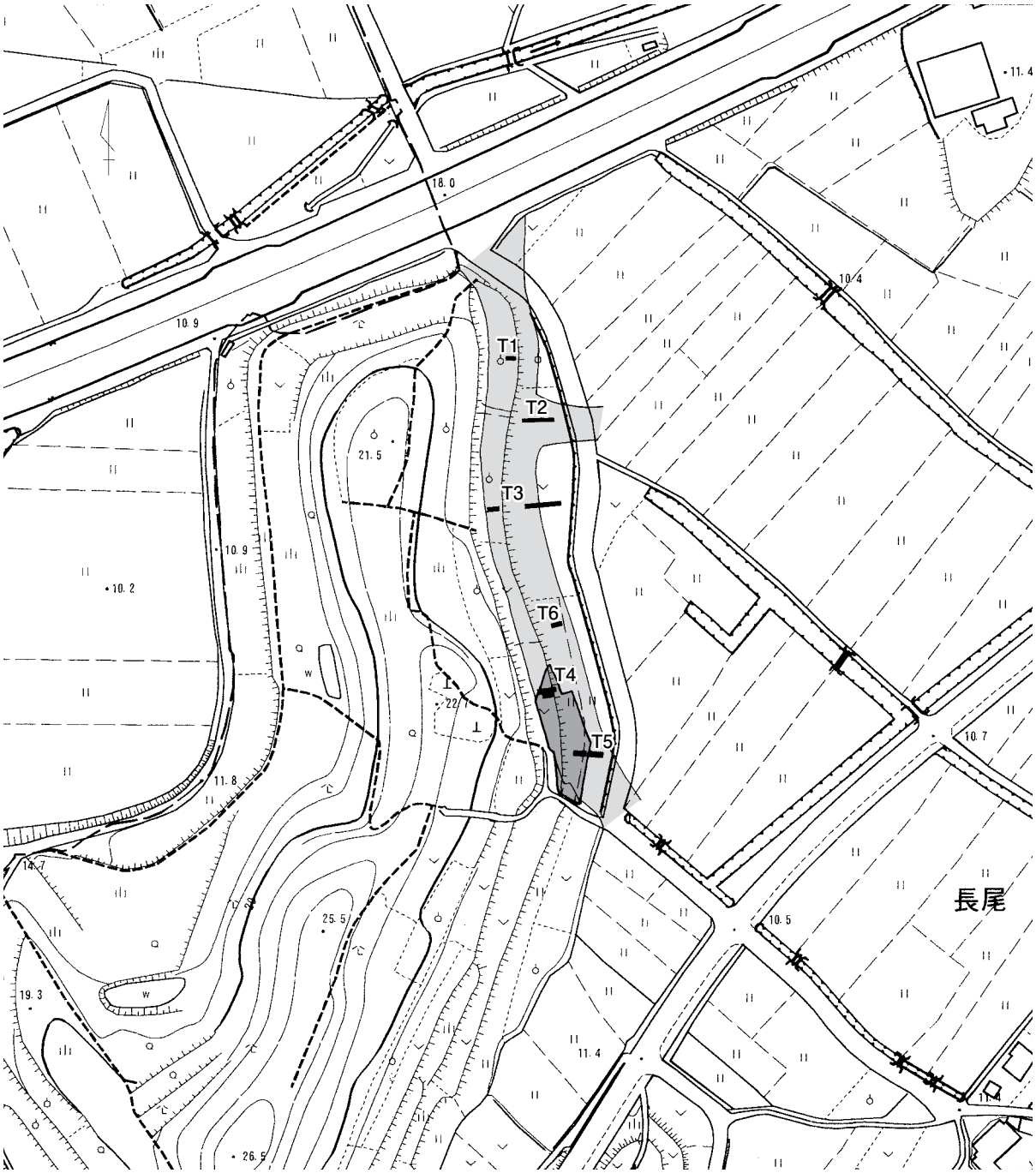


図３　調査位置図（1/2,500）

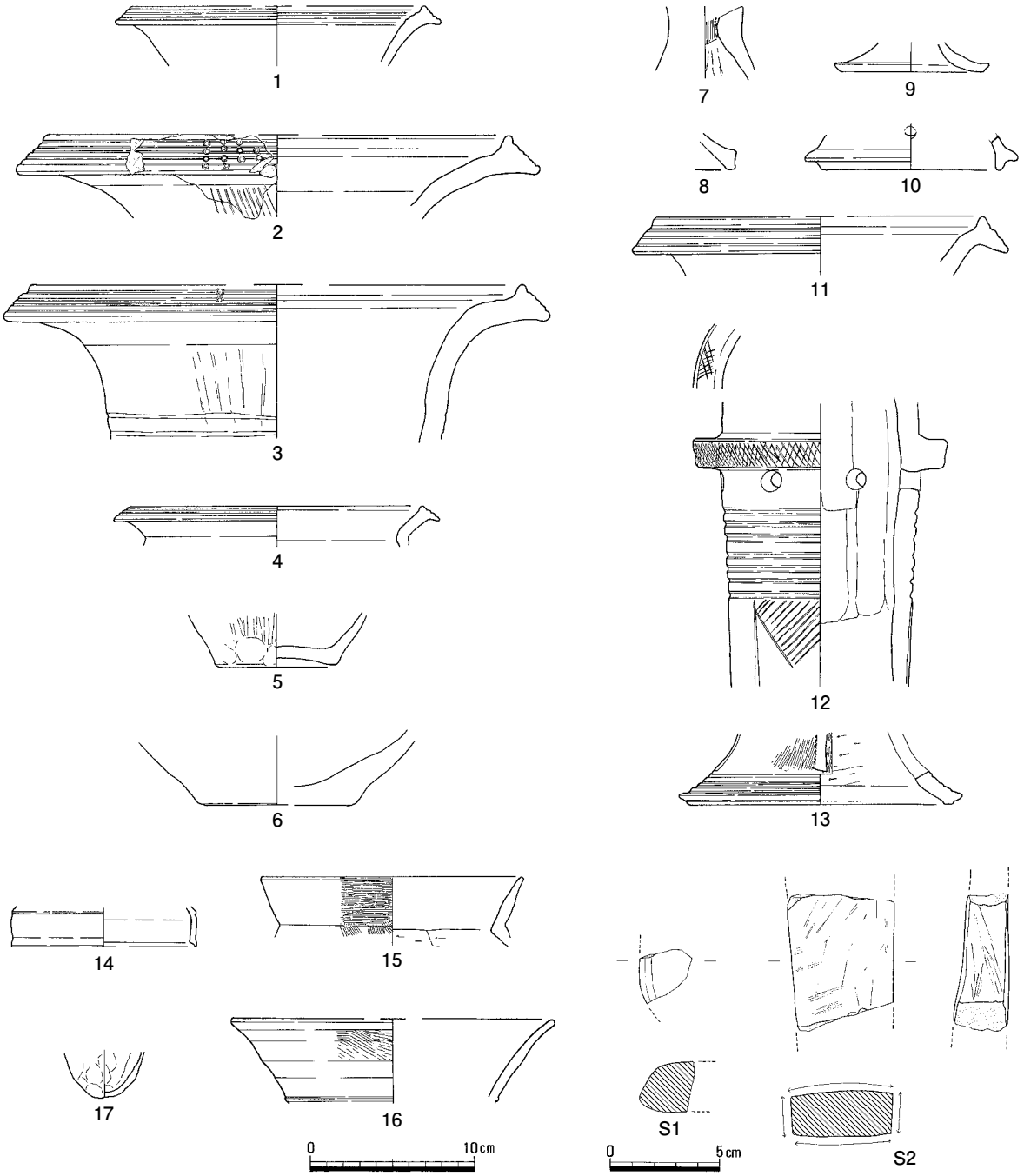


図４　確認調査出土遺物（1/4・1/3）

対象地北・中部のＴ１～３・６から遺構は検出されなかった。斜面上段に設定したＴ１とＴ３上段は、水田関連土層を除くと水平に地山が削平を受けており、開墾時に斜面が削平されていた。Ｔ２・３は前述のように斜面下方に遺物包含層が認められたが、遺構は確認されなかった。

以上の確認調査結果から、遺構・遺物の出土状況を考慮すると本来遺跡は丘陵全体に広がっていたと推定されるが、対象地は後世の開墾により遺跡が所々で大きく改変を受けていることが判明した。そのため、対象地南部のＴ４・５周辺で後世の削平をまぬがれ遺跡が残存している地点で切土工事が計画されている範囲について、記録保存を図るため本発掘調査の対象とした。斜面下位の遺物堆積層については、掘削深度から本発掘調査の対象から除外することとした。　（有賀祐史）

３　本発掘調査の経過

平成22年度に行った確認調査の結果を受け、平成24年10月から12月までの３か月間で本発掘調査を実施した。対象面積は500㎡で、担当職員は３名である。

調査前の対象地の地形は、水田等の開墾で大きく改変されており、上下２段となる段切りが認められた。調査は、現代耕作土と造成土を重機で除去したのち、弥生時代から中世までの土器を包含する黒褐色土を人力で掘り下げた。遺構の検出は、調査区西端の標高14m付近及び下段際では耕作土直下の削平を受けた地山面、他の斜面部では黒褐色土掘り下げ後の地山上面で行った。本来、斜面の下位に床面が盛土形成されていたと考えられる竪穴住居や段状遺構等については、その遺存の可能性も考慮して精査に努めたが、すでに削平及び流失したものとみられ、認められなかった。

なお、丘陵の屈曲点に当たる調査区の南西側では、近代以降と考えられる２か所の大規模な落ち込みが見られた。南端のものは調査区外に広がるもので、南北長で９ｍ以上、東西長で４ｍ以上、深さ1.25m以上を測り、検出状況から溜め井と推定された。

平成24年12月１日には現地説明会を開催し、地元住民を中心に65名の参加があった。　（高田）

第２節　報告書作成の経過

平成25年６月３日、事業者と赤磐市教育委員会教育長は報告書作成に関する覚書を締結した。

遺物整理は、前年度に行った遺物洗浄に続き、土器の復元と遺物の抽出を行った後、実測・浄写作業及び写真撮影を実施した。確認調査出土の遺物との検討も行い、遺構に伴うことが判明した２点については、該当遺構の項に掲載している。掲載遺物は、土器73点、鉄器２点、石器３点である。

遺構整理は、実測図の検討を行ったうえで下図を作成して浄写を行った。発掘調査時の所見及び出土遺物の検討から、近代以降に属する落ち込み等については不掲載とした。掲載遺構は、竪穴住居４軒、段状遺構３基、掘立柱建物１棟、土坑５基、溝８条である。

その後、これらをもとに全体の割付作業や原稿作成、編集作業を行った。　（高田）

第３節　日誌抄

（確認調査）

平成23年

２月１日㈫　確認調査開始

２月24日㈭　確認調査終了

（本発掘調査）

平成24年

10月９日㈫　資材搬入、本発掘調査開始

11月８日㈭　教育委員視察

12月１日㈯　現地説明会開催

12月25日㈫　遺跡全景写真撮影

12月26日㈬　資材撤収

12月27日㈭　本発掘調査終了

（報告書作成）

平成25年

６月３日㈪　報告書作成開始

平成26年

３月31日㈪　報告書作成終了

第４節　発掘調査及び報告書作成の体制

赤磐市教育委員会

教 育 長	土井原敏郎（～平成25年７月）
	永島　英夫（平成25年９月～平成26年２月）
教育次長	宮岡　秀樹
〈社会教育課〉	
課　　長	奥田　智明（～平成23年３月）
	正好　尚昭（平成23年４月～）
副 参 事（文化財班長）	高田恭一郎（本発掘調査・報告書担当）
主　　幹（文化財係長）	澤山　孝之（確認調査担当）
主　　任	有賀　祐史（確認調査・本発掘調査・報告書担当）
嘱　　託	畑地ひとみ（確認調査・本発掘調査・報告書担当）

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財確認調査の報告

文書番号 日付	周知・ 周知外	遺跡の種類 及び名称	所在地	面積(㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
赤教社 第903号 H23.３.24	周知	集落跡 着銅遺跡	赤磐市長尾500ほか	91	その他開発 （企業立地）	有	赤磐市教育委員会 教育長　土井原敏郎	澤山孝之 有賀祐史 畑地ひとみ	H23.２.１～ H23.２.24

埋蔵文化財発掘の届出（法第93条）

岡山県文書 番号　日付	遺跡の種類 及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	届出者	期間	主な指示事項
教文埋 第570号 H24.８.７	集落跡 着銅遺跡	赤磐市長尾字上ノ丁 475-3ほか133筆	90,426.96	その他建物 （オートオークション会場）	事業者	H24.８.20～ H27.３.31	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	遺跡の種類及び名称	所在地	面積(㎡)	原因	報告者	担当者	期間
赤教社 第493号 H24.10.11	集落跡 着銅遺跡	赤磐市長尾字着銅500 番地ほか	460	道路	赤磐市教育委員会 教育長　土井原敏郎	高田恭一郎 有賀祐史 畑地ひとみ	H24.10.９～ H24.12.28

遺物発見通知・文化財認定（法第100条・第102条）

岡山県文書 番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第1337号 H23.３.１	弥生土器、須恵器ほか 計整理箱２箱	赤磐市長尾500ほか 名称未定(山陽町359)	H23.２.１～ H23.２.24	赤磐市教育委員会 教育長　土井原敏郎	事業者	赤磐市山陽郷土資料館
教文埋 第1164号 H25.１.７	土師器、須恵器ほか 計整理箱６箱	赤磐市長尾500ほか （着銅遺跡）	H24.10.９～ H24.12.27	赤磐市教育委員会 教育長　土井原敏郎	事業者	赤磐市山陽郷土資料館

第３章　発掘調査の概要

第１節　調査の概要

調査地は、遺跡の南端に当たる東向きの緩斜面で、標高約11.5～14mの範囲に位置する。調査区の中央には、後世の開墾に伴う比高差約1.2mの段切りがあり、調査区を上下２段に分けている。

古墳時代の遺構は調査区全体で、古代と中世のものは上段で検出した。各遺構は、その長軸方向を等高線に対して平行にとっている。調査区北東部に当たる下段は、後世の削平を大きく受けているものと考えられる。これは、下段の遺構の長軸方向と現況の掘削ラインが異なることからも推定される。

本書に掲載した遺構は、古墳時代の竪穴住居４軒、段状遺構３基、土坑５基、溝５条、古代の掘立柱建物１棟、中世の溝３条である。柱穴については、所属時期の特定の困難なことから、角礫をもつなど特徴的なものについて掲載をしている。（高田）

第２節　古墳時代の遺構と遺物

１　竪穴住居

竪穴住居１（図５～７、図版１－１・２、４）

調査区北側で検出した竪穴住居で、２回の建替が認められる。斜面下位の東側は後世の削平を受けて遺存していないが、平面は方形を呈し、山側には外周溝が２条廻る。住居１ａと１ｂは重複し、１ｂが一回り大きい。その南西側に少しずれて住居１ｃが位置する。検出が困難であったため建替の順序は明瞭とは言い難いが、埋土の堆積状況と遺物の出土状況から住居１ｃから１ｂへの順で建替えられたと推定される。住居１ａは１ｂ床面の検出段階で確認したため、１ｂより古い可能性があるが、現状で確定できない。

また住居北辺でカマド１基を検出した。このカマドが１ａ、１ｂどちらの住居に伴うかは不明瞭であったが、いずれかの住居に伴う。カマドは上部が大きく削平されていたが、燃焼部には焼土がみられ、煙道は外に延びる構造をもつ。住居１ａは西辺476㎝、住居１ｂは西辺540㎝、住居１ｃは西辺517㎝を測る。いずれの住居も壁体溝を伴い、多数の柱穴が検出されたが、主柱穴は判然としなかった。柱穴の位置関係と深さ等から、Ｐ１とＰ２が住居１ａあるいは１ｂの西側の主柱穴となる可能性が指摘できる。南半床面では長さ250㎝の細長い舟形の土坑が認められた。

山側の外周溝については位置関係から外周溝１が住居１ａ・１ｂに、外周溝２が住居１ｃに伴うと考えられる。外周溝１は幅40㎝、深さ23㎝を測り緩やかな台形状を呈し、外周溝２は幅27㎝、深さ17㎝で弓状をなしている。それぞれに住居と外周溝は約50～75㎝離れているのみである。外周溝は山側に住居を取り囲むように掘削されていることから、山側から流入する雨水等を排水する機能をもっていたのではないかと考えられる。

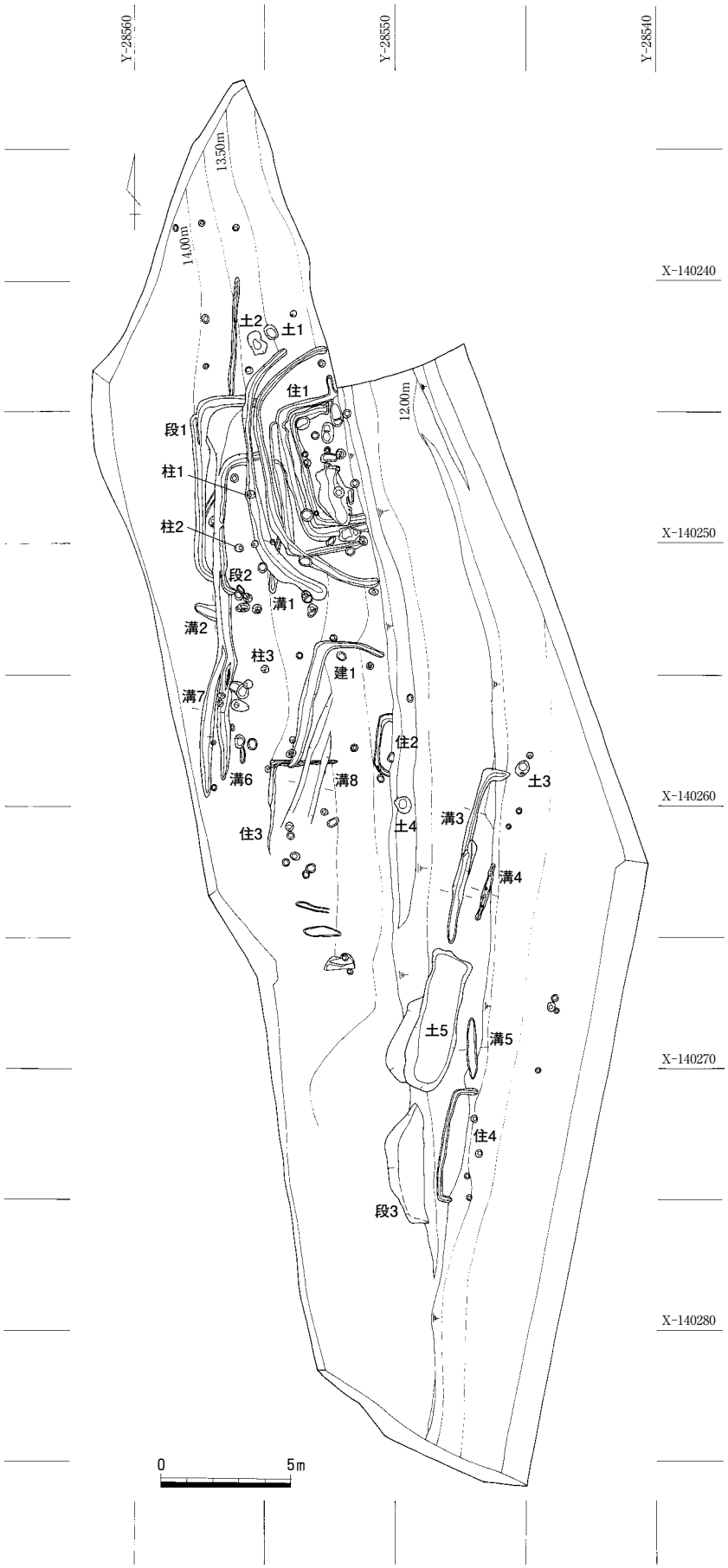
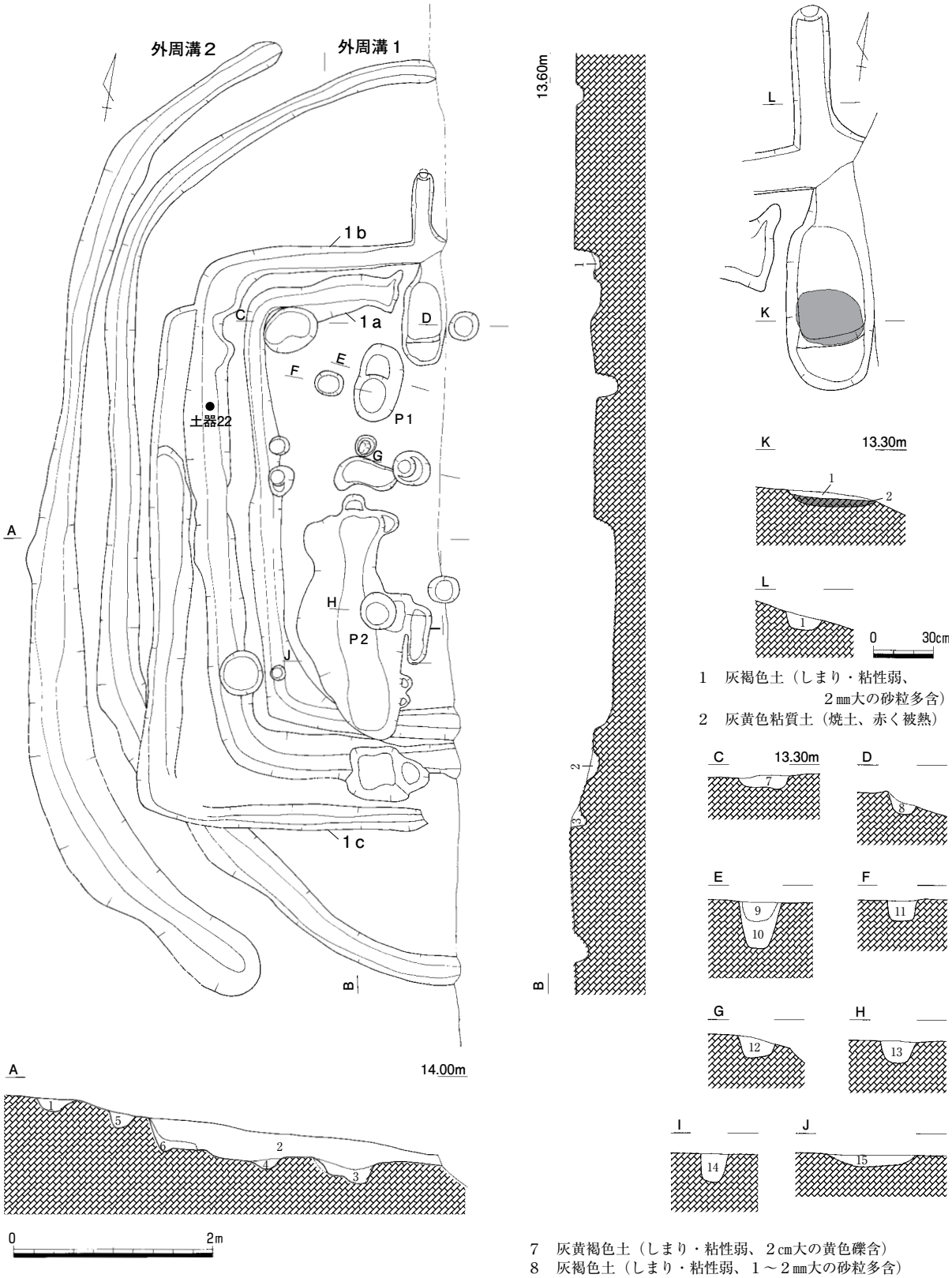

Y-28560
Y-28550
Y-28540
X-140240
X-140250
X-140260
X-140270
X-140280
13.50m
14.00m
12.00m
土2
土1
住1
段1
柱1
柱2
段2
溝1
溝2
柱3
建1
溝7
住2
溝6
溝8
土3
土4
溝3
住3
溝4
土5
溝5
住4
段3
0
5m

図５　全体図（1/250）



1　灰褐色土（しまり・粘性弱、２㎜大の砂粒多含）
2　灰黄色粘質土（焼土、赤く被熱）

1　褐灰色土（しまり・粘性弱、１～２㎜大の砂粒多含、２～３㎝大の白色礫含）
2　褐灰色土（しまり・粘性弱、２～３㎜大の礫多含）
3　灰黄褐色土（しまり・粘性弱、0.5㎝大の黄色礫含）
4　暗褐灰色土（しまり弱、粘性あり、１㎝大の白色礫含）
5　暗橙褐色土（しまり・粘性弱、２～３㎜大の砂粒・２㎝大の黄・橙・白色礫多含）
6　暗黄褐色土（しまりややあり、粘性弱、２㎝大の黄色礫含）
7　灰黄褐色土（しまり・粘性弱、２㎝大の黄色礫含）
8　灰褐色土（しまり・粘性弱、１～２㎜大の砂粒多含）
9　灰褐色土（しまり・粘性弱、１㎜大礫含）
10　灰黄色粘質土（しまり弱、粘性あり）
11　暗黄褐色粘質土（しまり弱、粘性あり、５㎝大の礫僅少含）
12　暗灰褐色土（しまり・粘性弱、１～２㎜大の砂粒含）
13　灰褐色土（しまり弱、粘性あり、0.5㎜大の礫多含）
14　灰褐色土（しまりあり、粘性弱、２㎜大の砂粒多含、炭粒含）
15　灰黄褐色土（しまり弱、粘性あり、１～２㎜大の砂粒含）

図６　竪穴住居１・外周溝１・２（1/60）・竪穴住居１カマド（1/30）

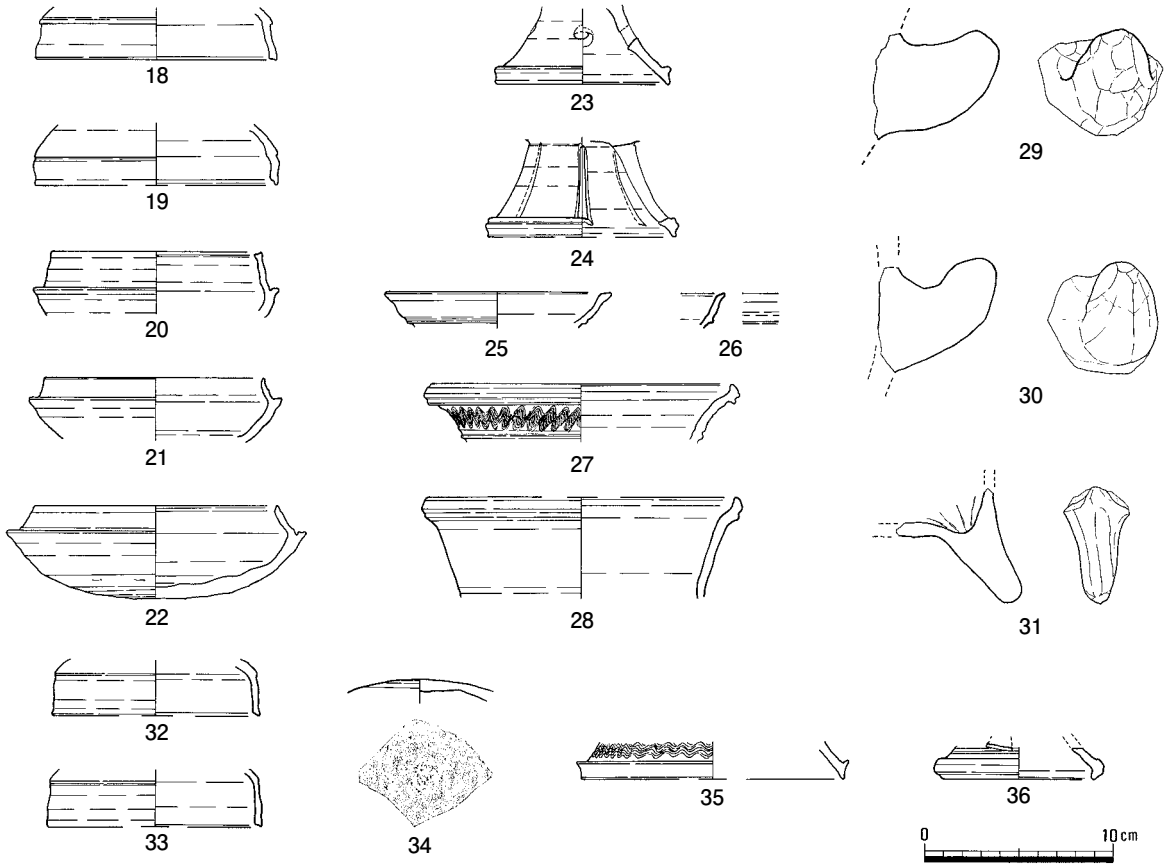


図７　竪穴住居１・外周溝１・２出土遺物（1/4）

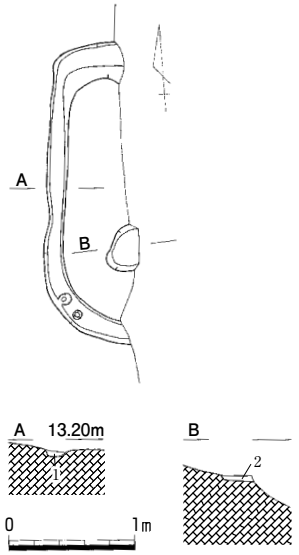
出土遺物として、住居１の埋土から須恵器の杯蓋**18**・**19**、杯身**20**～**22**、高杯**24**、土師器の甑の把手**29**・**30**等が出土した。杯身**22**は住居１ｂの床面近くで出土したもので、全体の2／3程度が残っており、ＭＴ15型式段階と考えられる。Ｐ１から須恵器の高杯**23**、瓶と考えられる須恵器**25**が出土した。外周溝１の埋土からは須恵器の杯蓋**32**～**34**等が出土し、外周溝２の埋土から須恵器の高杯**36**が出土した。

これらの土器には、杯身**20**や杯蓋**32**・**33**等のＴＫ23～47型式段階のものも認められる。したがって、各住居の詳細な時期は不明であるが、５世紀末～６世紀前半に連続して住居が営まれたものと判断される。（有賀）

竪穴住居２（図５・８、図版１－３）

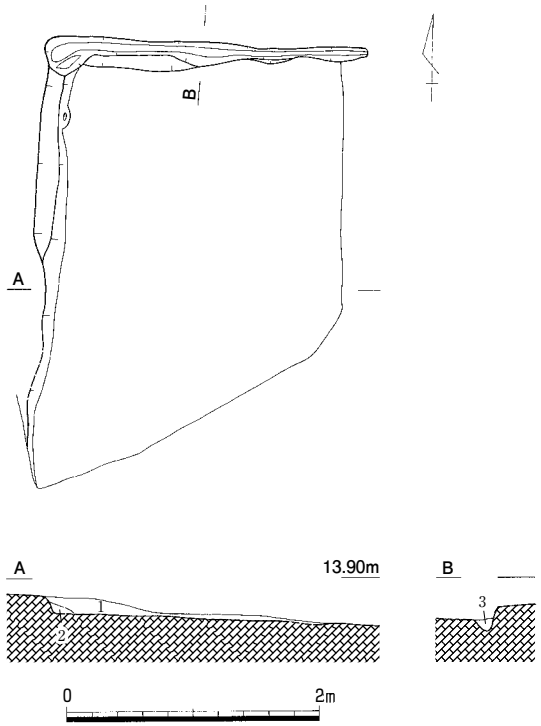
調査区上段の中央、竪穴住居３の北東に位置する竪穴住居である。東側と上面は後世の削平を受けており、遺構の西側４分の１程度が残存するのみである。現状では長軸200㎝の隅丸方形を呈し、幅16㎝の壁体溝が周囲を巡る。柱穴は削平を受けた１基を南西側で検出したのみである。柱穴は現状では楕円形の平面形を呈し、直径36㎝、深さ５㎝を測る。柱痕跡は検出されなかった。

埋土から土師器片が出土したが、細片のため図化し得なかった。遺構の時期は古墳時代と考えられる。（畑地ひとみ）



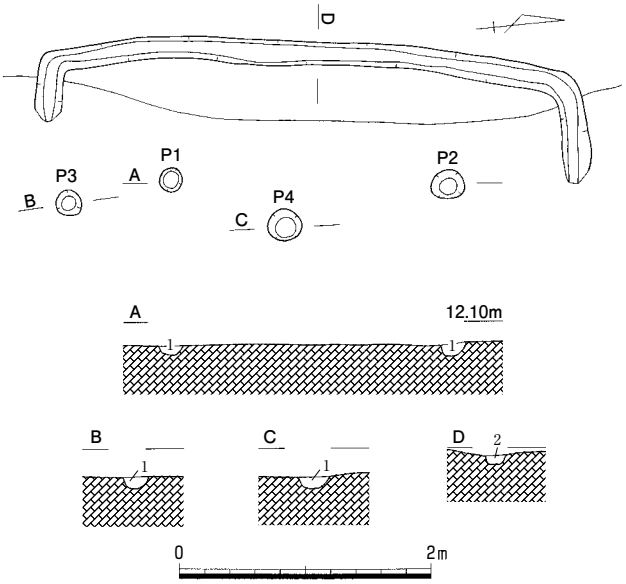
1　灰褐色土（黄色ブロック含）
2　暗灰褐色土（３㎜大の礫含）

図８　竪穴住居２（1/60）



1　暗灰褐色土（しまり弱、粘性なし、１～２㎝大の黄・白色礫含、１～２㎜大の砂粒多含）
2　暗黄褐色土（しまりやや強、粘性なし、黄色ブロック含）
3　暗灰褐色土（しまりやや弱、粘性なし、黄色ブロック・５㎜大の白色礫含）

図９　竪穴住居３（1/60）



1　暗灰褐色粘質土（しまりやや強、粘性強、黄色ブロック混）
2　黒褐色粘質土（しまり・粘性やや強、１～３㎝程度の礫含、炭粒僅少含）

図10　竪穴住居４（1/60）

竪穴住居３（図５・９、図版２－１）

調査区中央の西寄りで検出した竪穴住居である。北・西二辺と床面の一部を確認したが、その他は遺存していない。また、上部を古代の掘立柱建物１の排水溝と中世の溝８に切られている。

平面形は方形を呈するものと考えられ、南北の残存長357㎝、東西の残存長255㎝を測る。北辺にのみ壁体溝が伴い、その規模は幅７～30㎝、床面からの深さは７～８㎝となる。住居の柱穴等、その他の施設は検出していない。

出土遺物は、少量の弥生土器と土師器片のみで、時期を決するものはない。

住居の時期は、検出状況から古墳時代と考えられる。　（高田）

竪穴住居４（図５・10、図版２－２、３－２）

調査区下段の南寄りで検出した竪穴住居である。大半は後世の削平で失われ、西辺と北・南辺の一部に沿う壁体溝を「コ」字状に検出した。検出面での溝幅は20㎝前後、深さ10㎝を測る。

床面の遺存も西端のみで、削平後の地山面において、住居内に収まる位置に４個の柱穴を検出している。このうち、Ｐ１と２が４本柱に復元される主柱の２本を構成すると考えられ、両者の柱間は225㎝を測る。

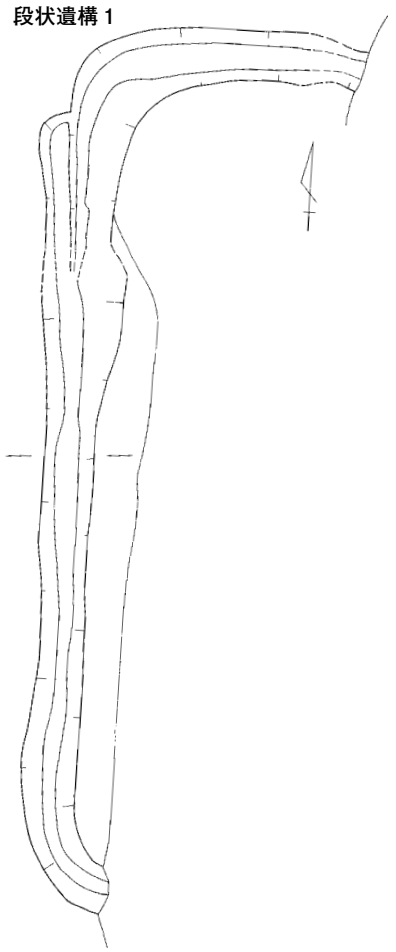
出土遺物は、弥生土器と土師器、須恵器細片で、住居の時期は古墳時代と考えられる。　（高田）

２　段状遺構

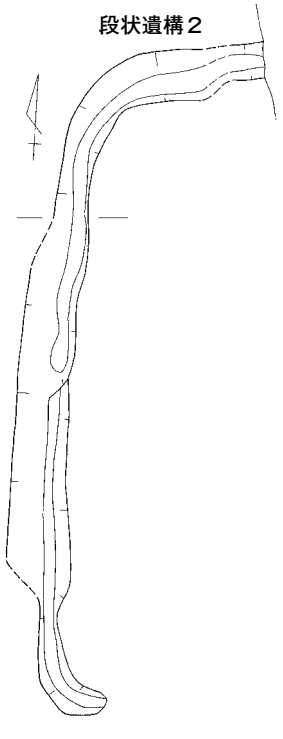
段状遺構１（図５・11、図版２－３）

調査区北西側に位置する。その東側に段状遺構２と竪穴住居１の外周溝１・２が接し、中世の溝６・７に切られる。検出時の規模は、南北703㎝、東西230㎝、溝の幅は40㎝前後、深さ12㎝を測る。

図示した土師器甕のほか、土師器・須恵器片と鉄滓が出土している。時期は中期末頃か。（高田）

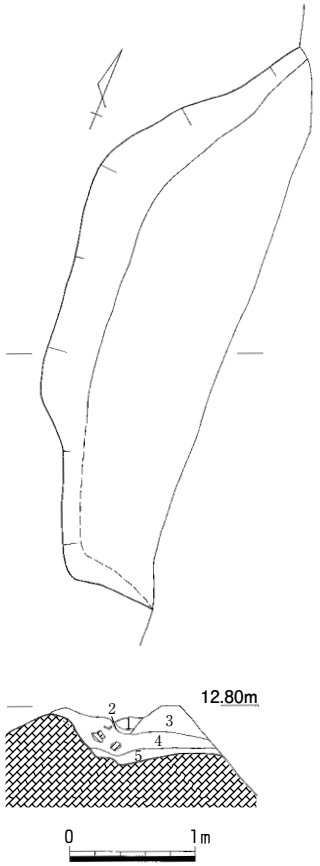


1　灰褐色土（しまり・粘性弱、砂質強、0.5～１㎝大の白・黄色礫含）



1　灰褐色土（しまりややあり、粘性弱、炭・0.5㎝大の白・黄色礫含）

図11　段状遺構１・２（1/60）・段状遺構１出土遺物（1/4）



1　黒灰褐色土（ブロック状、３層と同じ、撹乱？）
2　褐灰色土（撹乱？）
3　黒灰褐色土（しまりよい、砂粒多含、炭含）
4　黒褐色土（しまりよい、角礫・炭粒含、砂粒多含）
5　暗黄褐色粘質土（しまりよい、砂粒多含、炭含）

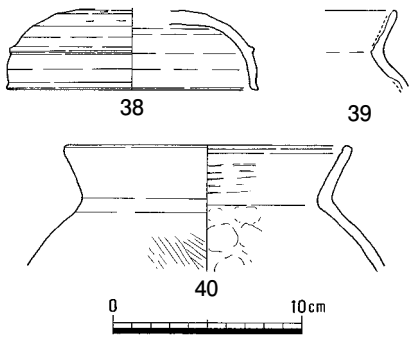


図12　段状遺構３（1/60）・出土遺物（1/4）

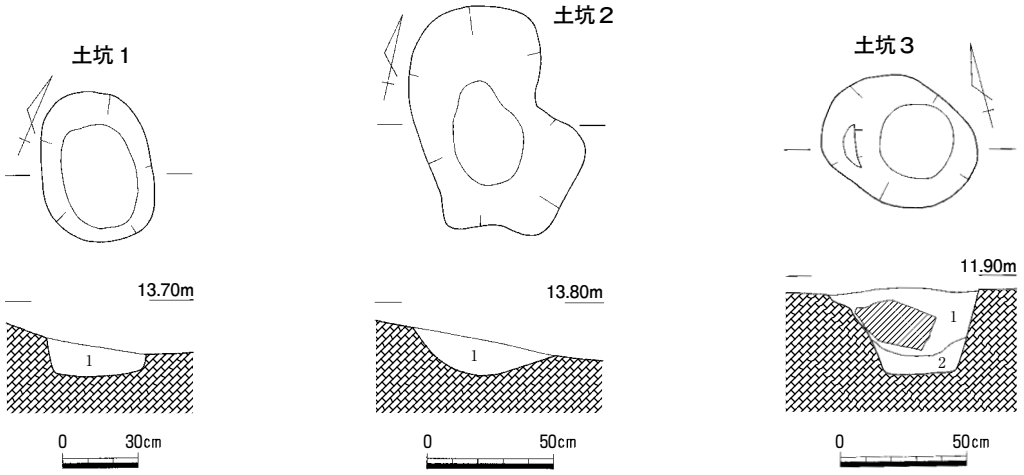
段状遺構２（図５・11、図版２－３）

前述の段状遺構１と竪穴住居１の間に位置し、一部を中世溝６・７に切られる。検出時の規模は、南北533㎝、東西150㎝、溝の幅は40㎝前後、深さ５㎝を測る。段状遺構１よりも溝底レベルで15㎝低い。出土遺物は須恵器と土師器の細片のみである。遺構の時期は、検出状況から古墳時代と考えられる。　（高田）

段状遺構３（図５・12、図版２－２、３－２）

調査区南側で検出した遺構で、竪穴住居４と土坑５に近接し、同時存在は考えにくい。東側を削平され、検出規模で南北460㎝、東西140㎝、深さ62㎝を測り、竪穴住居４の床面よりも約30㎝高い。平面形は不定で、凹凸をもつ床面から、山側の壁が斜めに立ち上がる。埋土は砂粒を顕著に含み、角礫がみられる。出土遺物は、大量の弥生土器とともに須恵器と土師器片が出土している。

遺構の時期は、出土土器の検討から５世紀末～６世紀初頭と考えられる。　（高田）



１　黄褐色土（しまりややあり、粘性なし、１㎜大の砂粒多含、３㎝大の黄・白色礫含）

１　暗黄褐色土（しまりややあり、粘性なし、0.5～１㎝大の白・橙・黄色の礫多含、２～３㎝大の白・黄色礫含）

１　黒褐色粘質土（しまり・粘性あり、５㎜大の白・黄色礫含）
２　黄灰褐色粘質土（しまり・粘性あり、黒灰色ブロック含）

図13　土坑１～３（1/30）

３　土坑

土坑１（図５・13）

調査区北部、竪穴住居１の北側に位置する平面楕円形の土坑である。長軸60㎝、短軸43㎝を測る。出土遺物はほとんどないが、他の遺構との位置関係等から古墳時代に属すと考える。　（有賀）

土坑２（図５・13）

調査区北部、土坑１の西に位置する土坑である。平面形は不整円形で、長軸94㎝、短軸60㎝を測る。出土遺物は土師器片数点のみであるが、遺構の時期は古墳時代と考えられる。　（有賀）

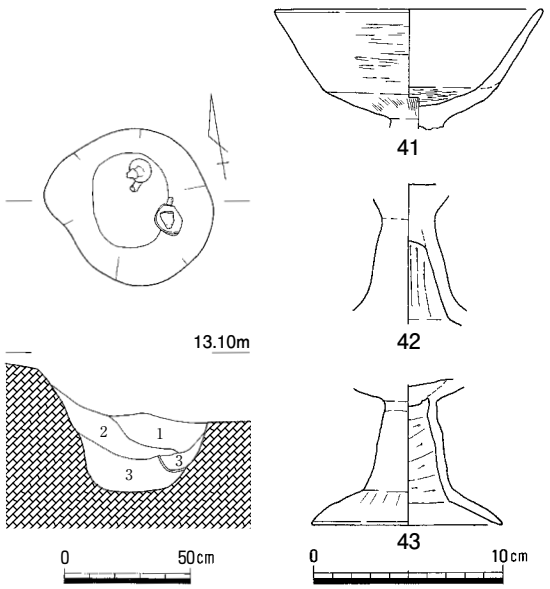
土坑３（図５・13）

調査区の下段中央、溝３の北側に位置する楕円形の土坑である。長軸62㎝、短軸48㎝、深さ32㎝で断面は逆台形を呈す。埋土は２層からなり、上層から須恵器甕の細片が出土した。古墳時代と考えられる。　（畑地）

土坑４（図５・14、図版３－１、４）

調査区中央、竪穴住居３の東方で検出した平面円形の土坑である。長軸67㎝、短軸62㎝、検出面からの深さ42㎝を測る。底部は平坦で、壁は外方に立ち上がる。埋土は比較的しまりのある黒褐色系の土層で、最下層中、床面よりやや浮いた状態で土師器の高杯**41**～**43**が出土した。**41**は杯部、**42**は脚柱部で、**43**は脚部のみ完形である。

これらの出土遺物から、遺構の時期は５世紀末と考えられる。　（有賀）



１　灰黒色粘質土（しまり・粘性あり、２㎝大の黄色礫含）
２　黒灰色粘質土（しまり・粘性あり、２㎜大の黄・白色礫含）
３　黒褐色粘質土（しまり・粘性あり、２㎝大の黄色礫多含）

図14　土坑４（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑５（図５・15・16、図版３－２・３、４）

竪穴住居４と段状遺構３の北側に近接する。当初は、削平された下段の平面において隅丸長方形のプランを検出し、その後の精査で壁の一部が上段まで立ち上がることを確認した。

検出時の規模は、長軸540cm、短軸239cm、深さ114cmを測る。ほぼ平坦な底面から急斜に立ち上がった壁は、中位で屈曲して外方に広がる。底面には施設等は認められなかった。埋土はブ

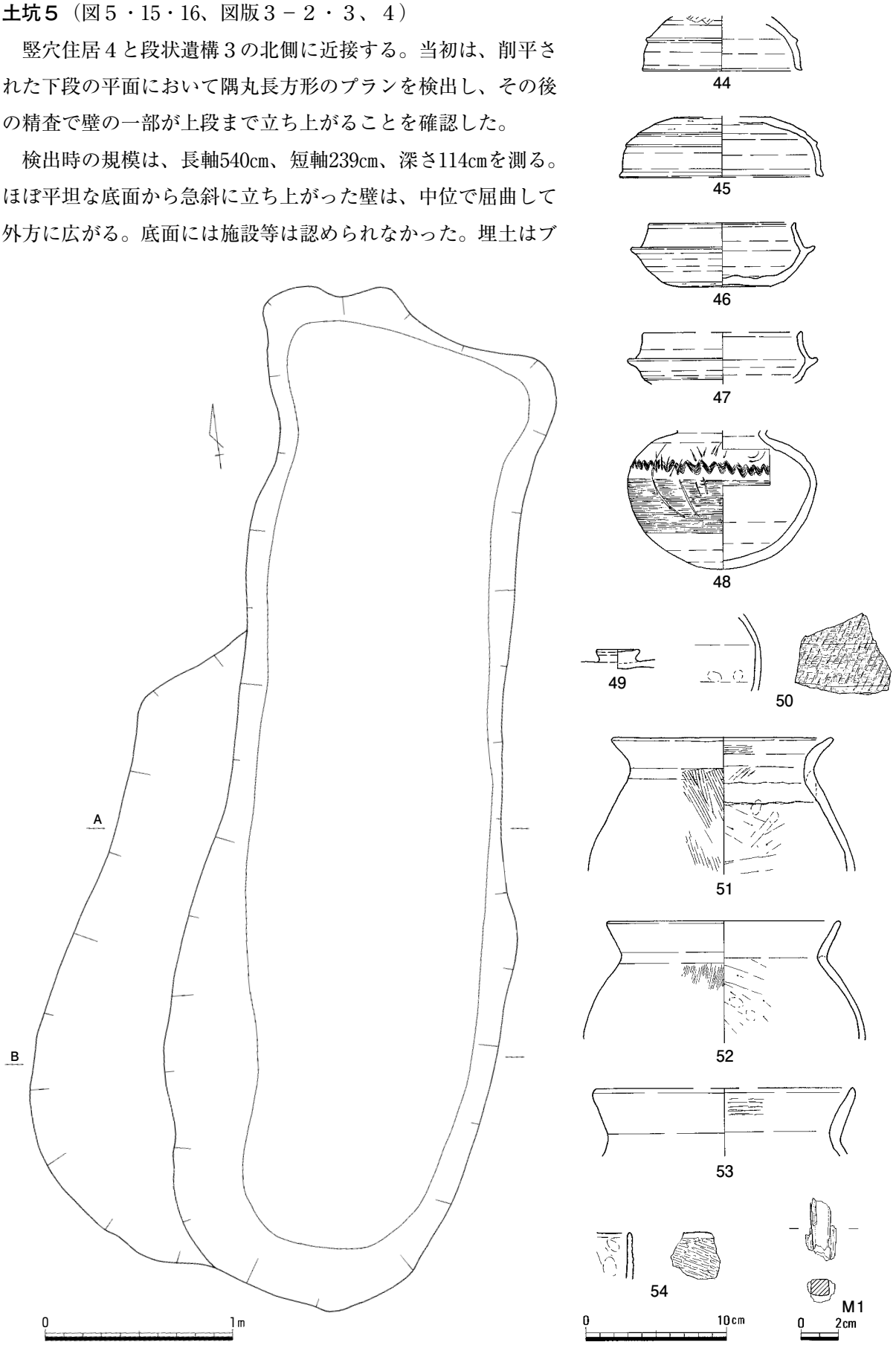
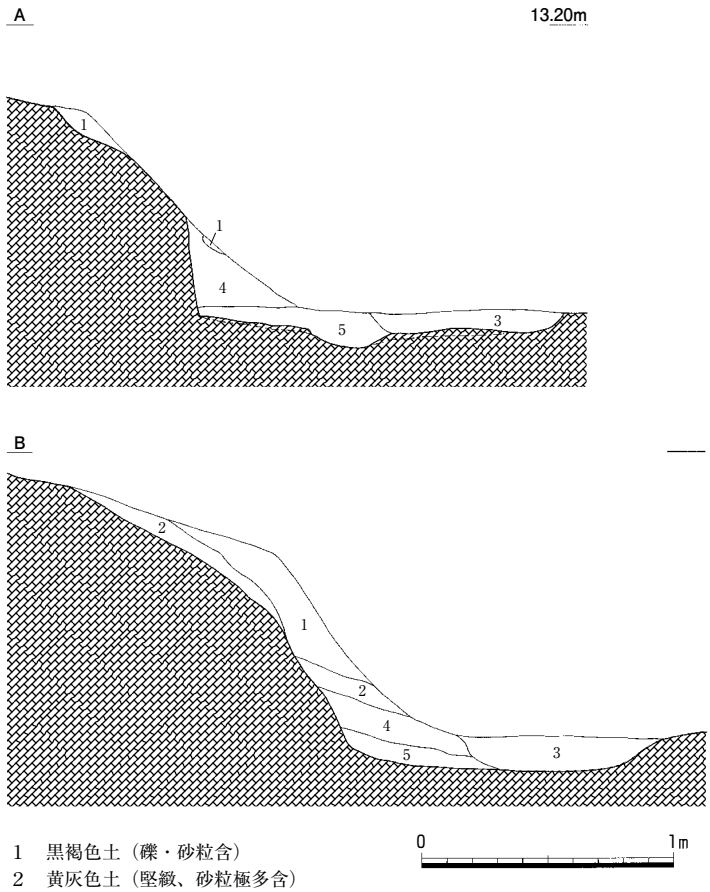


図15　土坑５（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）



1　黒褐色土（礫・砂粒含）
2　黄灰色土（堅緻、砂粒極多含）
3　暗黄褐色粘土～粘質土（しまりよい、黒褐色粘土ブロック・砂粒多含、礫含）
4　明黄褐色土（堅緻、地山ブロック）※充填
5　暗黄褐色粘質土（堅緻、黒褐色土ブロック含、砂粒多含）

図16　土坑５断面図（1/30）

ロック土を充填するもので、礫や砂粒を顕著に含む。特に西側の壁際の埋土は堅緻で、調査時、地山との区別が困難な箇所があった。

図示した遺物は、須恵器の杯44～47・49、壺48・50、土師器の甕51～53、製塩土器54、鉄釘M1である。このうち、須恵器杯45と壺48、土師器甕51は、南東部の底面近くにまとまって廃棄されていた。このほかに弥生土器が相当量出土している。

遺構の用途は不明であるが、検出状況からは廃絶後に人為的な埋め戻しが想定される。

本土坑の廃絶時期は、出土遺物と検出状況からから５世紀末～６世紀初頭と考えられる。　（高田）

4　溝

溝１（図５・17）

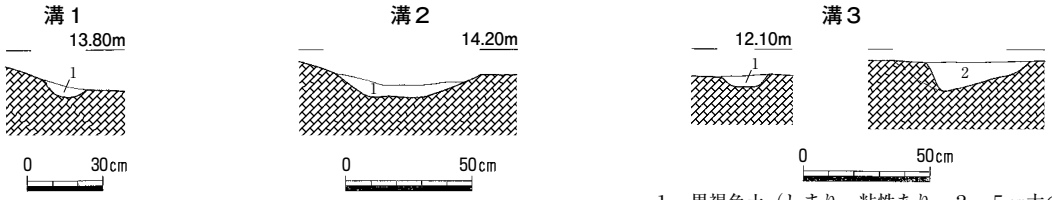
竪穴住居１の南西に位置し、同外周溝２に重なる位置にある。検出長約２ｍ、幅17㎝、深さ９㎝を測る。出土遺物はなく、検出状況から古墳時代と考えたい。　（高田）

溝２（図５・17）

上部を後世の水田造成で削平され、東側を中世溝６・７に切られる。検出長約１ｍ、幅55㎝、深さ11㎝を測り、断面形は逆台形を呈する。土師器細片が出土し、古墳時代と考えられる。　（高田）

溝３（図５・17）

調査区下段中央付近に位置し南北方向に延びる溝で、北端でＬ字状に東に折れる。北側では上部幅18㎝、深さ８㎝、逆台形の断面を呈するが、南側では壁の立ち上がりが緩やかになり、上部幅41㎝、深さ11㎝を測る。当初は南北で埋土が異なるため溝２条として調査を行ったが、繋がったため一連の



溝１
1　灰褐色土(しまり・粘性弱、１～３㎜大の白色礫含)

溝２
1　灰褐色土（粘性なし、５㎜大の白・黄色礫含、炭粒僅少含）

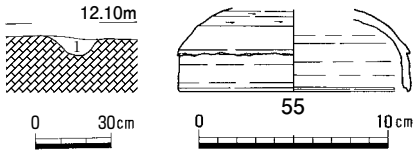
溝３
1　黒褐色土（しまり・粘性あり、２～５㎝大の黄色礫含）
2　灰黄色粘質土（しまりややあり、黒褐色ブロック・２～５㎝大の黄・白礫含）

図17　溝１～３（1/30）

溝とした。遺物は小片のみで図化し得なかった。遺構の時期は古墳時代と考えられる。　（畑地）

溝４（図５・18）

調査区下段中央、溝３の東側に平行して南北方向に延びる溝である。上端幅22㎝、深さ８㎝、椀形の断面を呈する。底部に小ピットが５基並び、何らかの構造物があった可能性がある。出土した須恵器杯蓋**55**から、６世紀代と考えられる。（畑地）

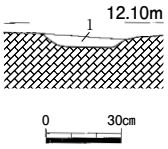


1　黒褐色粘質土（しまり・粘性やや強）

図18　溝４（1/30）・出土遺物（1/4）

溝５（図５・19）

調査区下段南半部、土壙５の東側に位置し南北に延びる溝である。上端部33㎝、深さ６㎝と浅く、壁は緩やかに立ち上がり逆台形を呈する。土師器細片が数点出土しており、時期は古墳時代と考えられる。（畑地）



1　黒褐色粘質土（しまり・粘性やや強）

図19　溝５（1/30）

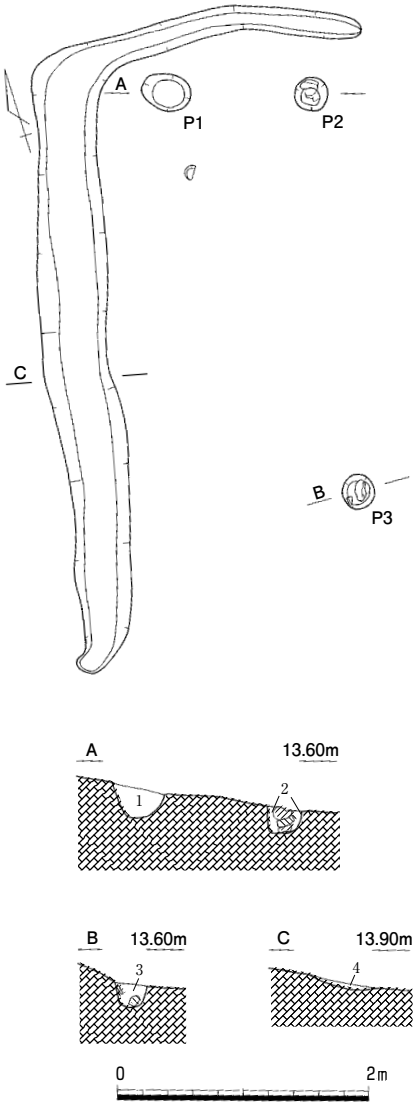
第３節　古代以降の遺構と遺物

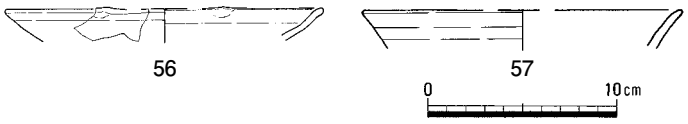
１　掘立柱建物

掘立柱建物１（図５・20、図版４）

調査区ほぼ中央に位置する建物である。建物を囲うようにＬ字形の溝が伴う。建物を構成する柱穴は３基確認したが、南西側のものは削平により検出することができなかった。さらに柱穴が東側に続く可能性もあるが後世の削平を受けている。Ｐ１は平面楕円形で長軸40㎝、Ｐ２・３は平面円形で直径35㎝を測る。東側のＰ２・３には、礫が入っており根石と考えられる。Ｐ２には５個の礫が積まれており、Ｐ３には２個の礫が認められた。桁行は320㎝、梁行115㎝を測る。

山側には、最大幅53㎝を測るＬ字形を呈する溝が検出された。この溝は、竪穴住居１の外周溝と同様に山側からの雨水等を排水する役割があったのではないかと考えられる。溝からは緑釉陶器の皿**56**と椀**57**が出土しており、遺構の時期は平安時代と考えられる。　（有賀）





1　灰褐色土（しまり・粘性弱、炭含）
2　灰褐色土（しまり弱、粘性ややあり）
3　灰橙褐色土（しまりややあり、粘性弱、１～２㎜大の砂粒・３～５㎜大の橙色礫多含）
4　灰褐色土（しまり・粘性弱、２～３㎜大の砂粒多含、炭多含）

図20　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1/4）

２　溝

溝６（図５・21）

調査区中央西寄りに南北方向に設けられた溝である。上面幅40㎝、深さ９㎝を測り、北側で溝７とつながる。斜面下位の東側には柱穴がいくつも認められ平坦面をなしているが、建物として明瞭にまとまらなかった。埋土はしまりの弱い淡灰褐色土で中世の土器を含んでいる。出土遺物として、土師質土器**58**・**59**、吉備系土師質土器椀**60**～**62**、土師器の羽釜**63**、鍋**64**・**65**がある。これらの出土遺物から、遺構の時期は13世紀と考えられる。（有賀）

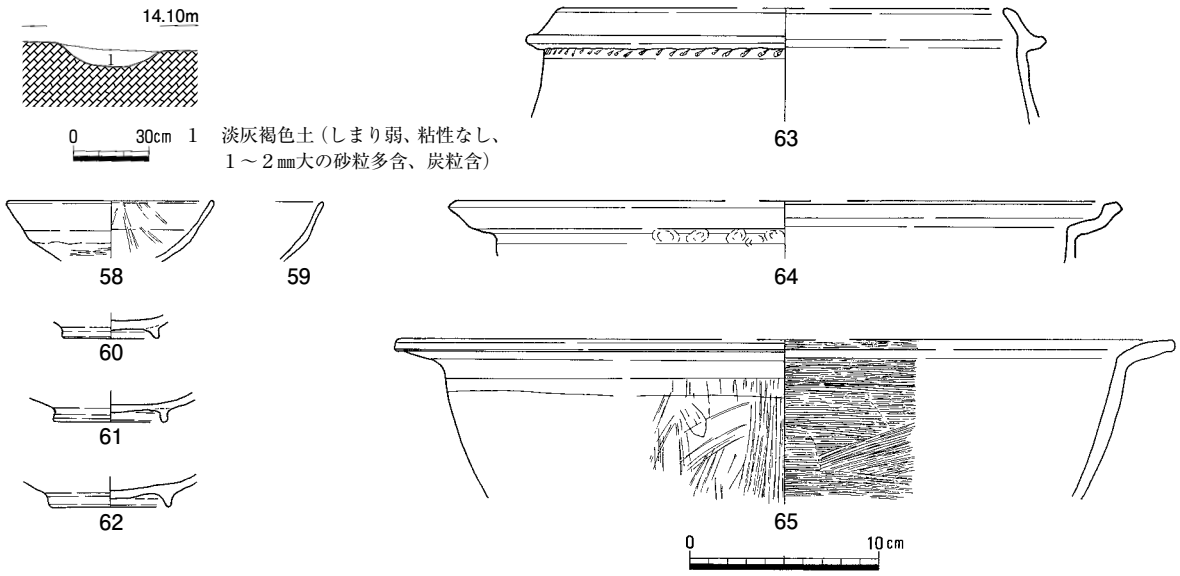


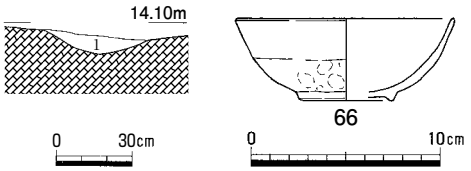
図21　溝６（1/30）・出土遺物（1/4）

溝７（図５・22）

調査区中央西寄り、溝６の西側に位置する。上面幅40㎝、深さ10㎝を測り、北側で溝６とつながる。溝６と同様に平坦面をなしており、東側に柱穴を伴う。出土遺物として吉備系土師質土器椀**66**があり、遺構の時期は13世紀と考えられる。（有賀）

溝８（図５・23）

古墳時代の竪穴住居３に重なる溝である。北北東－南南西方向に流走し、検出長で約5.5m、幅100㎝、深さ12㎝を測り、断面形は皿形を呈する。検出状況は、住居及び古代の柱穴を切っていることから、出土遺物はないものの、中世に属するものと考えたい。（高田）



1　淡灰褐色土（しまり弱、粘性なし、１～２㎜大の砂粒多含）

図22　溝７（1/30）・出土遺物（1/4）

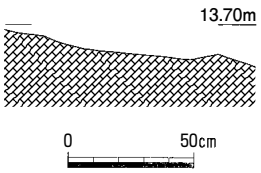


図23　溝８（1/30）

３　柱穴(図５・24、図版４)

調査区全体で柱穴を検出し、そのうち遺物を出土したものは約30個である。古墳時代から中世に属するものと考えられるが、建物としてはまとまらない。本項では、調査区北部に位置する特徴的なものを掲載する。

柱穴１・３は、いずれも底からやや浮いた位置に、角礫を２段に積んでおり、柱の根石と考えられる。Ｐ１からは古墳時代の須恵器杯蓋片が出土している。Ｐ２は、竪穴住居１と段状遺構間に位置するもので、検出時の平面形は楕円形を呈し、径33～28㎝、深さ42㎝を測る。埋土は暗灰褐色土で、その中位からは復元長20㎝となる鉄製紡錘車Ｍ２が出土している。（高田）

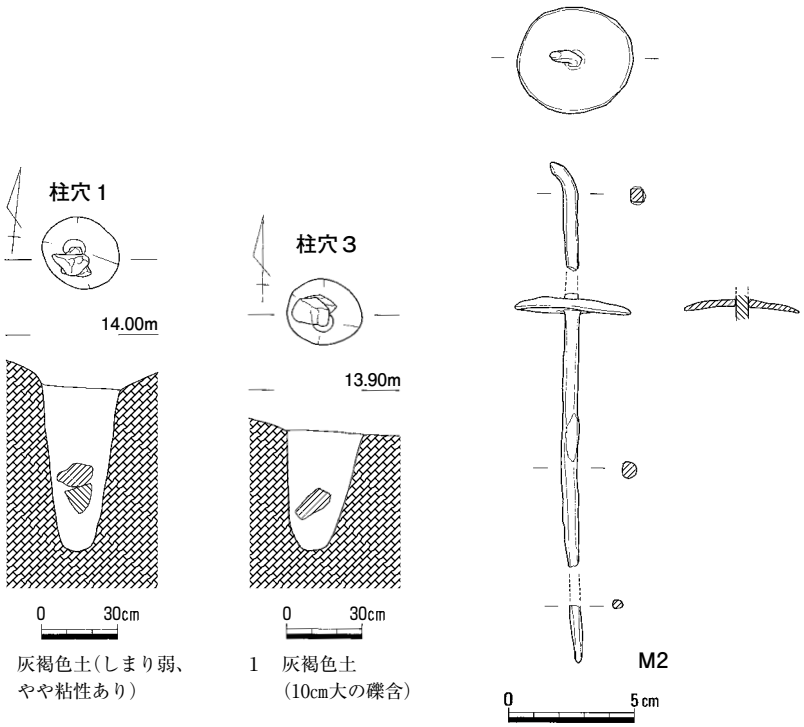


図24　柱穴１・３（1/30）・柱穴２出土遺物（1/3）

第４節　包含層等出土の遺物（図25、図版４）

掲載した土器は、調査区上段の地山斜面に堆積する黒褐色土から出土したものである。須恵器の杯蓋67・68、杯身69、杯70・71、高杯脚72、甕73である。このうち67は、内面天井部にヘラによる線刻の一部がみられる。Ｓ３はサヌカイト製の楔と考えられる。（高田）

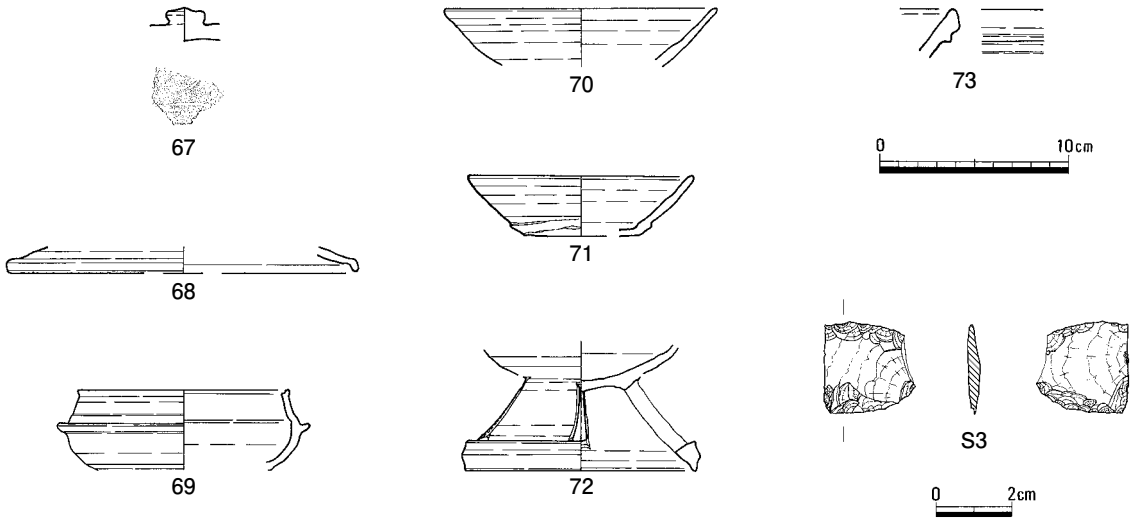


図25　包含層等出土遺物（1/4・1/2）

第４章　総　括

今回の調査により、着銅遺跡における弥生時代以降の集落変遷の一端が明らかになった。

弥生時代の明確な遺構は確認していないが、相当量の出土遺物がある。本書において図示したのは、確認調査で出土した土器と石器であり、時期は後期前半と考えられる。このことから調査区の上位、標高約20～22m前後の丘陵頂部付近に同時期の集落が想定される。

古墳時代は、竪穴住居４軒、段状遺構３基、土坑５基、溝５条を確認した。丘陵斜面に築かれた**竪穴住居１**は、２回の建替を経ながら５世紀末～６世紀前半に存続したものと考えられる。斜面上位からの雨水等の流入を防ぐ外周溝と、北辺の壁体に造り付けられたカマド１基を検出した。いずれの時期の住居に伴うカマドかは不明だが、本集落における導入時期を示すものと考えられる。

古代は、平安時代に属する**掘立柱建物１**がある。斜面上位からの雨水等の流入を防ぐＬ字形の溝を付属し、この溝から緑釉陶器片が出土している。このほか、調査区全体で検出した柱穴のいくつかは、古代の遺物を出土するが建物にまとまらなかった。

中世は、概ね鎌倉時代に属する３条の溝を確認した。**溝６・７**の斜面下位には、中世の遺物を出土する柱穴があり、溝は屋敷地の斜面上位を画するものと考えられる。

次に、市内における古墳時代の集落遺跡を概観する。

門前池遺跡（山陽）は、着銅遺跡の北西約２㎞、門前池西側の標高約20～40mの谷底と丘陵の斜面に位置する。発掘調査により、古墳時代の竪穴住居14軒を検出し、そのうち着銅遺跡の遺構時期に重なる古墳時代中期後半は５軒、後期前半は１軒である。いずれもカマドは未検出である。

斎富遺跡（斎富）は、着銅遺跡の北東約２㎞、丘陵の裾部から南東に広がる扇状地状の平野に位置する。古墳時代前半期の竪穴住居は17軒を検出し、同後半期には竪穴住居35軒、掘立柱建物36棟と、集落規模が拡大する。着銅遺跡の遺構時期に重なる古墳時代中期後半の住居数は11軒、後期前半10軒である。後期後半には竪穴住居が減少し、掘立柱建物への住居形態の変化が指摘される。中期後半の住居には、オンドル状遺構の可能性が指摘される溝や、住居隅の被熱痕跡から造り付けカマドの一時的採用と推定されるものがある。さらに後期前半の住居には造り付けカマドが設けられ、カマドの本格的な導入時期と考えられる。住居内からは陶質土器や軟質系土器など朝鮮半島系遺物が出土し、朝鮮半島からの人の移動や移住が想定され、また、遺跡内での製鉄関連作業の可能性も指摘される。

着銅遺跡における古墳時代住居の造り付けカマドの採用は、斎富遺跡とほぼ同時期と考えられる古墳時代中期後半～後期前半代であり、市南部の砂川中流域でのカマド採用の開始時期といえる。一方、門前池遺跡の同時期の住居にはカマドが認められないことなど、集落間、集落内のカマドの導入の在り方は一様ではない。また、朝鮮半島系の遺構・遺物が顕著に出土した斎富遺跡に対し、着銅遺跡では出土がなく、今回の調査は集落や地域構造を考えるための貴重な資料となろう。

引用・参考文献

新東晃一・松本和男・枝川陽1975『門前池遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告９　岡山県教育委員会

下澤公明ほか1996『斎富遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105　岡山県教育委員会

表２　遺構一覧表

竪穴住居

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	床面までの深さ（cm）	床面海抜高（m）	柱穴	壁体溝	カマド位置	外周溝			調査時遺構名
						本数			名称	形状	規模（cm）	
竪穴住居１ａ	方形	476	(190)	－	13.15	?	全周？	北辺中央？	外周溝１	台形状	幅40、深さ23	№26住居（外周溝１は№30溝、外周溝２は№27溝）
竪穴住居１ｂ	方形	540	(245)	30	13.20	?	全周？	－				
竪穴住居１ｃ	方形	517	(290)	31	13.28	?	全周？	－	外周溝２	弓状	幅27、深さ17	
竪穴住居２	隅丸方形	240	(70)	－	13.10	1/？	全周？	－				
竪穴住居３	方形	(357)	(255)	22	13.57	×	一部	－				
竪穴住居４	方形	444	(90)	－	12.07	2/4？	全周？	－				

掘立柱建物

遺構名	規模	柱間距離（cm）		棟方向	柱穴		溝（cm）						調査時遺構名
		桁	梁		掘り方平面形	深さ(cm)	平面形	断面形	上端幅	底面幅	深さ	底面海抜高（m）	
掘立柱建物1	1×1？	320	115	N-46°-W	円～楕円	23～53	L字形	皿形	20～53	10～32	11	13.13～13.65	№19建物(溝は№17溝)

段状遺構

遺構名	長軸（cm）	短軸（cm）	床面までの深さ（cm）	床面海抜高(m)	柱穴	壁体溝	調査時遺構名	備　　考
段状遺構１	703	(230)	12	13.93	－	コ字状	№28溝	
段状遺構２	533	(150)	－	13.76	－	コ字状	№29溝	
段状遺構３	460	(140)	62	12.34	－	－	№12段状遺構	

土坑

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面海抜高(m)	調査時遺構名	備　　考
土坑１	楕円形	逆台	60	43	15	13.40	№34土坑	
土坑２	不整形	椀	94	60	19	13.51	№33土坑	
土坑３	楕円形	逆台形	62	48	32	11.51	№９土坑	
土坑４	円形	逆台形	67	62	42	12.55	№18土坑	
土坑５	隅丸長方形	逆台＋段	540	239	114	11.95	№２・13溝	

溝

遺構名	断面形	上端幅（cm）	底面幅（cm）	深さ（cm）	底面海抜高(m)	調査時遺構名	備　　考
溝１	椀形	17	9	7	13.61	№35溝	
溝２	逆台形	55	26	11	13.99	№32溝	
溝３	逆台形	18・41	8・12	5・11	11.95・11.93	№６・7溝	
溝４	椀形	22	7	8	11.97	№５溝	
溝５	逆台形	33	23	6	12.00	№４溝	
溝６	皿形	40	14	9	13.93	№21・22溝	
溝７	皿形	40	15	10	13.97	№14溝	
溝８	皿形	100	64	12	13.50	－	

柱穴

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面海抜高（m）	調査時遺構名	備　　考
柱穴１	楕円形	逆台形	31	27	67	13.04	上段P21	角礫２段積み
柱穴２	楕円形	逆台形	33	28	42	13.36	上段P17	鉄製紡錘車出土
柱穴３	楕円形	逆台形	30	27	48	13.36	上段P16	角礫２段積み

表３　遺物観察表

土器

掲載番号	出土地区	遺構名	種別	器種	計測値			色調（外面/内面）	残存状況	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高			
1	Ｔ５		弥生土器	壺	(17.8)		(3.6)	にぶい橙/にぶい橙	口縁～頸部1/10	口縁部内面に３本の沈線
2	Ｔ５		弥生土器	器台or壺	(28.0)		(5.0)	橙/橙	口縁部1/8以下	口縁部に４列の竹管文
3	Ｔ５		弥生土器	器台or壺	(29.8)		(10.5)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	口縁～頸部1/8以下	口縁部に竹管文
4	Ｔ５		弥生土器	甕	(17.6)		(2.5)	にぶい橙/にぶい橙	口縁部1/6	
5	Ｔ５		弥生土器	壺or甕		7.2	(3.4)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	底部	
6	Ｔ５		弥生土器	壺or甕		(13.4)	(4.6)	浅黄/浅黄	底部1/3	
7	Ｔ２		弥生土器	高杯			(4.5)	橙/黒褐	脚柱部1/3	円盤充填
8	Ｔ２		弥生土器	高杯			(2.2)	明赤褐/明赤褐	脚裾部片	
9	Ｔ５		弥生土器	高杯		(8.6)	(1.8)	明赤褐/灰褐	脚裾部1/6	
10	Ｔ５		弥生土器	高杯		(10.2)	(2.2)	橙/橙	脚裾部1/5	
11	Ｔ５		弥生土器	器台	(19.8)		(3.6)	橙/橙	口縁部1/8	
12	Ｔ５		弥生土器	器台			(17.6)	にぶい黄橙/明赤褐	脚柱部1/4	貼付突帯、円孔、鋸歯文
13	Ｔ５		弥生土器	器台		(15.0)	(4.5)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	脚裾部1/4	

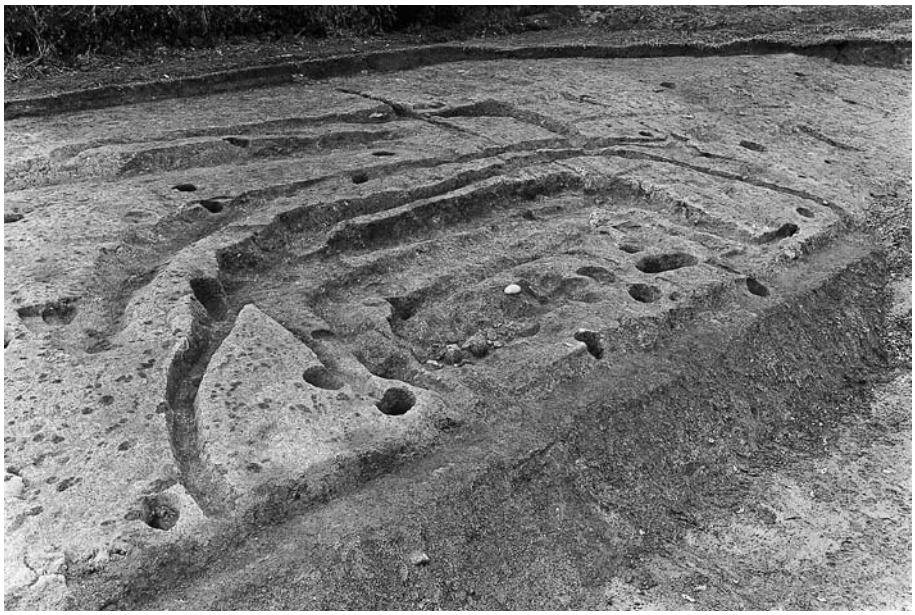
掲載番号	出土地区	遺構名	種別	器種	計測値			色調（外面/内面）	残存状況	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高			
14	T３		須恵器	杯蓋	(11.2)		(2.4)	灰/灰	口縁部1/12	
15	T５		土師器	甕	(15.8)		(4.2)	橙/浅黄橙	口縁部1/6	
16	T５		土師器	高杯	(19.6)		(5.1)	にぶい橙/にぶい橙	口縁部1/10	
17	T２		土師器	手捏ね土器			(2.8)	浅黄橙/浅黄橙	底部～胴部1/2	
18		竪穴住居１	須恵器	杯蓋	(10.6)		(2.65)	灰/灰白	口縁部1/8以下	
19		竪穴住居１	須恵器	杯蓋	(11.2)		(3.2)	灰白/灰白	口縁部1/8以下	
20		竪穴住居１	須恵器	杯身	(11.2)		(3.6)	青灰/青灰	口縁部1/6	
21		竪穴住居１	須恵器	杯身	(11.6)		(3.4)	灰/灰	口縁部1/6	
22	T４	竪穴住居１	須恵器	杯身	12.8		4.9	青灰/青灰	口縁～体部1/2強・底部完	
23		竪穴住居１	須恵器	高杯		(9.2)	(4.2)	灰/灰	脚部1/4	円形透かし2/4
24		竪穴住居１	須恵器	高杯		(10.0)	(6.0)	青灰/暗青灰	脚部1/8以下	台形透かし2/4
25		竪穴住居１	須恵器	甕？	(12.0)		(1.9)	灰/灰	口縁部1/4	
26		竪穴住居１	須恵器	甕？			(1.8)	灰/灰	口縁部小片	
27	T４	竪穴住居１	須恵器	壺	(15.8)		(3.1)	紫灰/灰	口縁～頸部1/4	波状文
28		竪穴住居１	須恵器	壺	(16.2)		(5.3)	灰白/灰白	口縁部1/8以下	
29		竪穴住居１	土師器	甑				明黄褐/明黄褐	把手	
30		竪穴住居１	土師器	甑				浅黄橙/浅黄橙	把手	
31		竪穴住居１	土師器					橙/橙	支脚？	
32		竪穴住居１	須恵器	杯蓋	(11.0)		(3.0)	青灰/青灰	口縁部1/8以下	透かし
33		竪穴住居１	須恵器	杯蓋	(11.4)		(3.0)	青灰/青灰	口縁部1/8以下	
34		竪穴住居１	須恵器	杯蓋			(1.2)	灰/灰	天井部	
35		竪穴住居１	須恵器			(13.8)	(1.9)	青灰/青灰	脚端部1/8以下	波状文
36		竪穴住居１	須恵器	高杯		(10.0)	(1.7)	灰/灰白	脚端部1/8	
37		段状遺構１	土師器	甕			(4.7)	橙/明黄褐	口縁部小片	
38		段状遺構３	須恵器	杯蓋	(13.2)		(4.2)	灰/灰	口縁部1/10	
39		段状遺構３	土師器	甕			(4.0)	橙/橙	口縁部小片	
40		段状遺構３	土師器	甕	(14.8)		(6.7)	橙/にぶい黄橙	口縁部1/8	
41		土坑４	土師器	高杯	14.0		(6.3)	橙/橙	杯部1/2	
42		土坑４	土師器	高杯			(7.45)	橙/黄橙	脚柱部	
43		土坑４	土師器	高杯		10.1	(7.6)	橙/橙	脚部	
44		土坑５	須恵器	杯蓋	(11.2)		(3.8)	灰/灰	口縁部1/4以下	
45		土坑５	須恵器	杯蓋	(14.5)		4.3	灰白/灰白	口縁部1/6以下	
46		土坑５	須恵器	杯身	(10.5)		4.45	灰/褐灰	口縁～体部1/3	
47		土坑５	須恵器	杯身	(11.2)		(3.6)	灰白/灰白	口縁部小片	
48		土坑５	須恵器	壺			(9.9)	暗青灰～灰白/青灰	体部4/5	肩部波状文・ヘラ記号？
49		土坑５	須恵器	杯蓋			(1.45)	青灰/青灰	つまみ	
50		土坑５	須恵器	壺			(5.85)	灰白/灰白	胴部小片	外面タタキ後ハケ目
51		土坑５	土師器	甕	(15.4)		(9.5)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	口縁～肩部1/4	
52		土坑５	土師器	甕	(16.4)		(8.45)	浅黄橙/浅黄橙	口縁～肩部1/8～1/4	
53		土坑５	土師器	甕	(18.4)		(4.9)	灰/灰	口縁部1/8	
54		土坑５	土師器	製塩土器			(3.35)	にぶい橙/にぶい橙	口縁部小片	
55		溝４	須恵器	杯蓋	(12.0)		(4.3)	灰/灰	口縁部1/6	
56		掘立柱建物１	緑釉陶器	輪花皿	(16.6)		(1.7)	釉：淡黄緑	口縁部小片	素地：須恵質　京都産・10C前半
57		掘立柱建物１	緑釉陶器	椀	(16.6)		(2.0)	釉：濃緑～淡黄緑	口縁部小片	素地：須恵質　京都産・10C前半
58		溝６	土師質土器	高台椀	(10.6)		(3.2)	灰白/灰白	口縁部1/6	
59		溝６	土師質土器	高台椀			(3.1)	浅黄橙/浅黄橙	口縁部小片	
60		溝６	土師質土器	高台椀		(5.1)	(1.6)	灰白/灰白	高台1/2以下	貼付高台
61		溝６	土師質土器	高台椀		6.0	(1.6)	灰白/灰白	高台3/4	貼付高台
62		溝６	土師質土器	高台椀		(6.2)	(1.8)	灰白/灰白	高台1/3	
63		溝６	土師器	羽釜	(23.4)		(6.2)	浅黄/灰白	口縁部1/8以下	口縁部内外にスス付着
64		溝６	土師器	鍋	(34.8)		(3.2)	にぶい黄橙/灰白	口縁部1/8以下	口縁部内外にスス付着
65		溝６	土師器	鍋	(40.8)		(8.4)	灰白/灰白	口縁～体部1/8以下	口縁部内外にスス付着
66		溝７	土師質土器	高台椀	(11.6)		(3.8)	灰/灰	口縁～底部1/8以下	貼付高台
67		包含層	須恵器	杯蓋			(1.7)	灰/灰	つまみ	ヘラ記号？
68		包含層	須恵器	杯蓋	(18.4)		(1.35)	灰白/灰白	口縁部小片	
69		包含層	須恵器	杯身	(11.0)		(4.25)	灰/灰白	口縁～体部1/6	
70		包含層	須恵器	杯	(14.2)		(3.1)	灰白/灰白	口縁部1/4以下	
71		包含層	須恵器	杯	(11.6)		3.15	灰白/灰白	口縁～底部1/4	重ね焼址
72		包含層	須恵器	高杯		(12.0)	(5.0)	灰/灰	脚部1/5	台形透かし2/4
73		包含層	須恵器	甕			(2.5)	青灰/青灰	口縁部小片	

鉄器

掲載番号	出土地区	遺構名	器種	計測値（cm）			材質	残存状況	備　考
				長さ	幅	厚さ			
M1		土坑5	釘	(3.2)	(1.0)	(1.0)	鉄	刃部一部のみ	木質残存
M2		柱穴2	紡錘車	(17.5)	(4.6)	(0.55)	鉄	一部欠損	推定全長20cm

石器

掲載番号	出土地区	遺構名	器種	計測値（cm）			石材	残存状況	備　考
				長さ	幅	厚さ			
S1	T3		石斧	(2.0)	(2.2)	(2.3)	※流紋岩	刃部一部のみ	
S2	T4		砥石	(6.2)	4.8	(2.6)	※流紋岩	一部欠損	
S3		竪穴住居3	楔	(6.2)	4.8	(2.6)	サヌカイト	一部欠損	

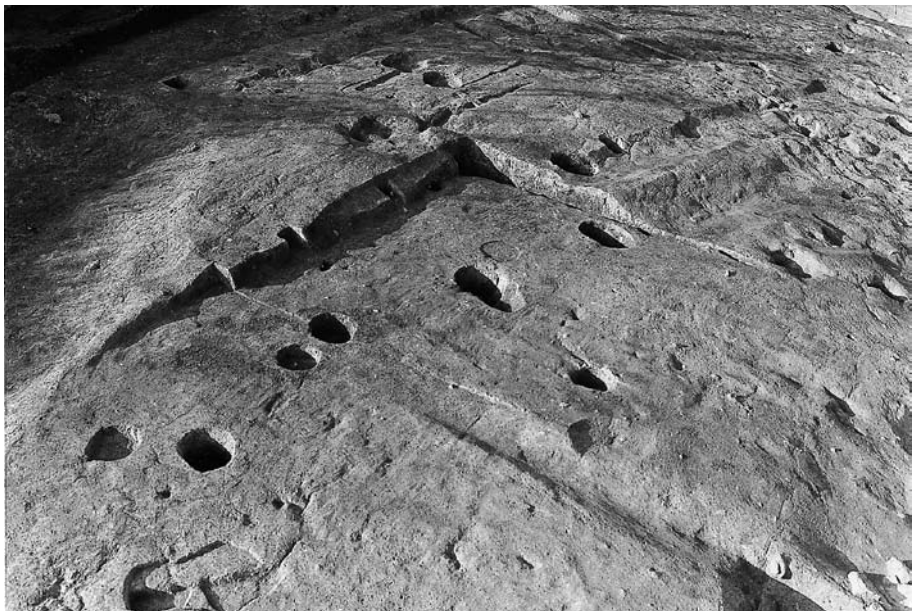


１　竪穴住居１・外周溝１・２（南東から）

２　竪穴住居１カマド（南から）

３　竪穴住居２（南西から）

図版２



１　竪穴住居３
（南東から）

２　竪穴住居４、
段状遺構３
（北東から）

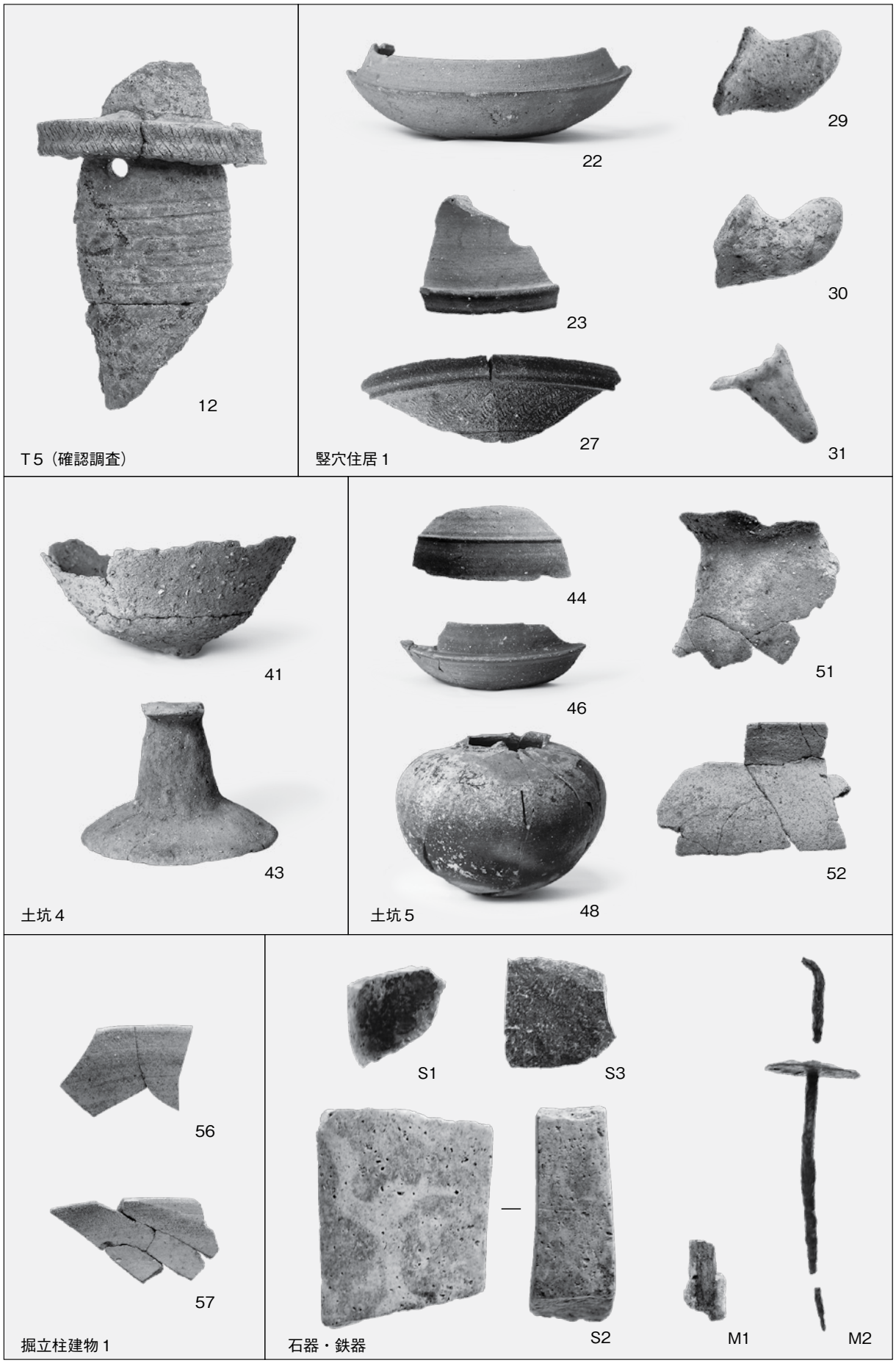
３　段状遺構１・２
（南から）

１　土坑４遺物出土状況
（南から）

２　土坑５、竪穴住居４、
段状遺構３
（北から）

３　土坑５遺物出土状況
（東から）

図版４


12
T５（確認調査）
22
29
23
30
27
31
竪穴住居１
41
43
土坑４
44
46
51
48
52
土坑５
56
57
掘立柱建物１
S1
S3
S2
M1
M2
石器・鉄器

土器・石器・鉄器

報告書抄録

ふりがな	ちゃくどういせき
書名	着銅遺跡
副書名	あかいわ山陽総合流通センター開発事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	赤磐市文化財調査報告
シリーズ番号	7
編著者名	高田恭一郎　有賀祐史　畑地ひとみ
編集機関	岡山県赤磐市教育委員会
所在地	〒709-0816　岡山県赤磐市下市337　TEL 086-955-0710　FAX 086-955-0758
発行機関	岡山県赤磐市教育委員会
所在地	〒709-0816　岡山県赤磐市下市337　TEL 086-955-0710　FAX 086-955-0758
発行年月日	2014年３月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
着銅遺跡（ちゃくどういせき）	岡山県赤磐市長尾500番地（おかやまけんあかいわしながお／ばんち）	33213	333220359	34°44′18″	134°1′8″	2012.10.9 ～ 2012.12.27	500	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
着銅遺跡	集落	弥生～古墳時代	竪穴住居４、段状遺構３、土坑５、溝５	弥生土器、土師器、須恵器、石器・石製品	外周溝と造り付けカマドをもつ竪穴住居
		古代～中世	掘立柱建物１、溝３	土師器、須恵器、緑釉陶器、鉄製品	

要約

遺跡は、北方向に舌状に延びる丘陵の東斜面に位置する。水田や畑・果樹園の造成によって大規模な土地改変を受けているが、遺構・遺物の検出状況を踏まえると、本来はこの丘陵全体に弥生時代以降の遺跡が広がっていた可能性が高い。

確認した遺跡は、主に古墳時代中期後半から後期前半の集落で、その後古代や中世にも集落が営まれたと考えられる。丘陵斜面に築かれた古墳時代の竪穴住居には、斜面上位からの雨水等の流入を防ぐための構造をもち、壁体に造り付けのカマドが認められるものがある。

赤磐市文化財調査報告　第７集

着　銅　遺　跡

あかいわ山陽総合流通センター開発事業に伴う発掘調査

平成26年３月８日　印刷
平成26年３月14日　発行

編集・発行　岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337

印　　刷　西尾総合印刷株式会社
岡山県岡山市北区津高651